

日本書紀傳

十二卷 乾

二十七

書利
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (36)	
函號	特	85 1



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



教部省
文庫印

清印
第九

南政官
文庫

日本書紀傳十二之卷

神代上第十

四神出生章

穗積重胤

謹撰

一書曰伊弉諾尊欲見其妹

乃到殞斂之處是時伊弉册

尊猶如生平出迎共語已而

謂伊弉諾尊曰吾夫君尊請

勿視吾矣言訖忽然不見于
時闇也伊弉諾尊乃舉一片
之火而視之時伊弉册尊脹
滿太高上有八色雷公伊弉
諾尊驚而走還是時雷等皆

起追來時道邊有大桃樹故
伊弉諾尊隱其樹下因採其
實以擲雷者雷等皆退走矣
此由桃避鬼之縁也時伊弉
諾尊乃投其杖曰自此以還

雷不敢來是謂岐神此本號
 曰來名戶之祖神焉所謂八
 雷者在背曰大雷在胸曰火
 雷者在腹曰土雷在背曰稚雷
 在尻曰黑雷在手曰山雷在

足上曰野雷在陰上曰裂衣雷

此也第六一書小遺以事の別小一段と成以て
 次の第十一書あどの如く獨立の傳小ハ非なる其
 ハ彼一書と古事記ハ大較同ト傳ある事誰も知れ
 如く然る小彼記小於其ハ雷神副千五百之黄泉軍令
 追云し追到黄泉比良坂之坂本時取在其坂本桃子三
 箇待擊者逃返也云々と云文有と其一書小ハ脱たり
 傳十百八十小註カガ如く此即化談節醜女亦以坂取之噉り即更
 追と有て次ハ後則伊弉册尊亦自來追と有り其間小

今此一文の無てハ事の足ハざり所多事百事記の
文小比較し知べし此任少も聞元ざり小ハ非
小伊弉冉尊共小加ハリ給へるが如く聞ゆれども
必然ハ有テ所アリ其ハ其醜女小十五百ノ黄
泉軍を副テ令追奉リしル也ト其挑實ヲ投リ又其
御杖を投リ奉レ者ガ改小追返とレ奉リ醜女
ハ雷神と云程の猛ク者アリしル也ト又追奉リ可シ
カ無リ故小伊弉冉尊の御自追來坐ル也ト此ハ
必文の無テ事斯レハ此ハ是時雷等皆起追來時道
の足ハざり所多事百事記の
邊有大挑樹故伊弉諾尊隱其樹下因採其實以擲雷者雷
等皆退走矣此用挑避鬼之縁也時伊弉諾尊乃投其杖
曰自此以還雷不敢來是謂雷神此本號曰來名戸之祖
神焉有是時雷等皆起追來ハ八字ハ上と承て下

ハ巨々語あれハ除キて時道邊有大挑樹以下七
十一字と右の嗽リ則更追の下ハ加へて試ス後則
伊弉冉尊亦自來追焉と云へ續クも文脉相續ト趣
意貫通テ却て古事記ノも勝リて思ユ事百リ其
ハ後記ハ船戸神の成坐ハ傳ハ無シと此ハ先大挑
樹有て次ハ其實ヲ云ハ次ハ其杖ト云ハ二ノ其字ハ
其挑樹を指て其ト云ハ乃投其杖曰自此以還雷
不敢來是謂岐神と有ハ愛シ貴シと云ハ更
あり其ハ彼一書ハ岐神の事ト絶妻之誓ト後小
即投其杖云其帶衣禪ト投給ハ例ハ爲リ
ハ叶ハ又古事記ハ御禊ノ故於投棄御杖所成
神名衛立船戸神と有ハ共ハ誤レ傳ハ由傳ハ

卷二百十二丁岐 此を以考ふる石小引る七十字餘の
神下註ウ 正説ハも第六一書の一聯の文ありしを廢れ散て
一傳の如く成て有りしを其耳してハ事の次序の
整らゆけり故に其事の聞ゆる程ハ其黄泉國の故
事を撮て上小係たる者ありて其ハ眞小神代の古説
小ハ非る者あり又下小所謂八雷者云々と云々も其
文者の作意ありて此彼より採入たる文ある事下小
辨らるが如くふれば此傳ハハ右の七十餘字耳が
神代の古傳説ハハ有けり 右の正説の廢レハ事と可
惜ハしみて傳へたる意ハ
も甚ハ珍重ハし者がり餘り小事の簡易ハを悉ハふと
て文と係らるが如くも甚ハし物害ハひる事ハば云

ハ云々者と思へば古人ハ其正小係たる文ハ
雖も心免ハる者あり百り其正小係たる文ハ
到殯斂之處ハ如何なる癖ハあるが如く口訣ハ殯斂之
處假斂死體之處也と有が如く忌ハし何と聞
小堪ハる逆言ハの妖言ハと云者あり忽然不見于時聞也
と有も仲哀天皇九年御紀ハ殯于豊浦宮爲无火殯斂
无火殯斂此謂と見えたる无火殯斂あとの事ハ思ハ哥
褒那之向斂利
此言と聞えし第六一書ハ攪入たる或所謂泉津平
坂者不復別有處所但臨死氣絶之際是之謂歟と云る
あど、同日の罪ある者あり抑伊弉册大神の崩坐ハ
と證ハ師の古史徵ハ引れたる鎮火祭詞ハ吾名妹能

命波 上津國并所知食倍吾波 下津國并所知并申氏石
 隱給氏與美津救坂小至坐氏所思食久云返坐氏更
 生子水神艷川菜植山姬四種物并生給氏云と有て
 現御身ふゞ往坐りあり若萌坐して其御靈の往坐
 ちありひふ其返坐して生坐り御子の現身して御在
 ず可うゞ又死靈の子と生ひと云事繼ひ神ふ有
 れ何てり出来り事の有り然らと當昔の人も已く
 萌御り事の思誤りて第二一書小所焦而終矣と記し
 第三一書小其且神避之時則生水神云と云ひ第五
 一書小葬於紀伊國熊野之有馬村焉あと書て殊小

甚く成れる者あり然ら黄泉國小神避り退去給
 ひ一事を謂ひ終焉の事と思へる終矣と書れ
 たると思ふ其且神避あも萌御し事と心得れ
 たる事決く又其第五一書ふるあと隱自紀伊國云
 三あと葬と爲て傍り葬奉り事と成て大ふ
 々自他の違も出来り事して第六第十一書又古事記
 ぶとも現御身して往坐る趣ありと氷炭の違有
 を如何ふとり爲む猶又此して到殯殿之處と云へ
 伊弉冉尊ハ亡し骸伊弉諾尊ハ現御身して其言
 語せる伊弉冉尊の蘓生せ方とり此一段ハ濟

べけれど第六一書小伊弉諾尊追伊弉册尊入於黄
泉而及之語時々々と有るは其女神と遇見ると思
ふは追て男神も崩御なりとや爲む又泉津平坂の事
ふじの幽霊等の戦とや爲む又其頭國小出給へるも
此より獲生せる事とや爲む伊弉册尊と崩御り坐り
とて古の如く指支ゆり節は多く有て如何かと
も此を云解し事信小難う可し是即神の御心ゆ
斯文を表給はざる耳あらず御紀を撰ばせ被たる當
昔の物知等儒佛の意小合せて記傳書られたる事共の
難れを其前後小相應はざる所如此く多有て古傳ハ古傳と

其條理相貫きて動う事子引磐の如く新意ハ新
意と其終まび處ハ在て立難く譬ハ水沫の如く解
散あり妙小奇し神事ありけり古史徴小鎮火祭
尊の崩御り御在し坐り由云れたるハ此大入の生
涯の大功此小過たるハ有るは信小十有余年の
惑を説けたる然れども御紀小力を入れたる事の
然計ハ深くも非りけり如此く照し應せし神代
乃古意を見り可き節ハ百と追ふハ決し○欲見其
心看れりけり甚可惜し事ありけり
妹ハ古事記小此を欲相見其妹伊弉那美命と有る訓
を借小欲見と阿比美麻久淤母高志氏と訓べし相真ハ
記傳小逢の意小見べしと云れたる義あり事云も更
あり万葉十二十七丁小相見久厭雖不足十二二十九丁小相見

△本小曾能表能
△處訓
△毛里乃止古
△訓三定澤
△然

欲爲者ふと見え又相を省きてハニ
三四丁 小朝ふ食女欲見四九丁 小勲見卷欲君可聞
と猶多在り何れも勲多し心より慕ふ義あり
見と有れバ見麻久思富志氏と訓ても有ぬ可き所
れども然てハ言の足はじり少り故に古事記
依て訓べと法 ○到殯殿之處△古事記小追往黄泉國
と見元第六一書小追伊弉册尊入於黄泉と有が如く
伊弉册尊の現御身ありて往坐し黄泉國と云國有
て其小追往坐しあり第十一書小伊弉諾尊追至伊
弉册尊所在處と有も殯殿之處と云ハ非ず其下小
及其妹相關於泉平坂と有れハ其所在處ハ黄泉國の

○向猫平生

△此一書と傳有り何れの家ハ然る枝意ハ物爲
あり其殯殿の事ハ欽明天皇三十二年御紀小奉長
子始起天皇喪禮と有れハ其項ハ秋九月己巳朔戊
子起り右の事共ハ被死天皇元年御紀ハ趣りて也知
と思へけれハ上少也之ハ如口訣小殯殿之處假殿死
體之處也と有て天孫降臨章小知天稚彦已死乃遣疾
風舉尸致天便造喪屋而殯之と見え其と第一一書小
將柩上本而於天作喪屋殯哭之と有り古事記小見
元ハ其喪屋ハ殯宮の如くして其柩を陵墓小葬り

事あり然れハ此一書耳何れハ古傳ハも相協ハじり
ハ此一書と傳有り何れの家ハ然る枝意ハ物爲
あり其殯殿の事ハ欽明天皇三十二年御紀小奉長
子始起天皇喪禮と有れハ其項ハ秋九月己巳朔戊
子起り右の事共ハ被死天皇元年御紀ハ趣りて也知
と思へけれハ上少也之ハ如口訣小殯殿之處假殿死
體之處也と有て天孫降臨章小知天稚彦已死乃遣疾
風舉尸致天便造喪屋而殯之と見え其と第一一書小
將柩上本而於天作喪屋殯哭之と有り古事記小見
元ハ其喪屋ハ殯宮の如くして其柩を陵墓小葬り

ごり以前も其も斂りて思ひも哭も爲て其思も盡す
所もあり仲哀天皇御紀も収天皇之屍云も殯于豐
浦宮爲元火殯斂元火殯斂此謂と百も古事記も坐殯
宮も百も是もあり万葉二四丁も從山科御陵退散之時
額田王作歌一首八隅知之和期大王之恐也御陵奉仕
流山科り鏡山尔夜者毛夜之盡畫者母日之盡哭耳呼
泣乍在而哉百磯城乃大宮人者亦別南と有り如く殯
宮も御陵も葬奉り近も假も其柩も納置て侍宿も
ご形も如く爲て仕奉り故も殯も母我理も加理母
我理も云事も其母も喪字も義も當て云物りり

このも思ひも
其も四十五
枉も切も

思の意我理も上も今も葬事を畢るも上り爲り
云ふ是も母我理も喪上加理母我理も假喪止と云
事も母思も事も万葉二高市皇子尊城上殯宮
之時歌も歎も未過も億未盡者も有り是も
古今集詞書も母も思も籠侍けり時云も有り始
て思も籠もと云詞の常も多在り其も切て云も可
一万葉五長調も靈刻も限者平氣之安久母阿良牟遠
事母無裳無母阿良牟遠と有り裳無も思無も能通
あり借此の殯斂も阿鐵利も訓ずも曾能衰も讀
來りも如何と云も通證も取園陵之義以訓之と有
唯其語も當て假初も云もあも元も當り
言あり然も上古の状も考も御陵も近も遠
も被定も事無も殯宮も必大宮の御園も

云つ可き近傍の園又ハ原野ふこ被定り式と見え
て其一二と云へど万葉ニ二丁日並知皇子尊殯宮之
時歌ハ何方ル御念食可由縁母無真弓乃齒ル宮柱太
知奉御在香辛高知座而ト見元其短歌ハ外ル見之檀
乃国毛君座者常都御門跡侍宿為鴨ト百リ其皇子尊
の宮ハ鳴宮ハと殯宮ハ檀園ハ又ニ丁明日香皇
女城上殯宮之時歌ハ三五月之益日頗添所念之君與
時ニ幸而遊賜之御食向木庭之宮平常宮跡定賜ト見
元又三丁高市皇子尊城上殯宮之時歌ハ吾大王皇子
之御門ハ神宮ハ尔裝束奉而云ハ朝毛吉木上宮平常宮

等定奉而神隨安定座奴ト百リ皇女宮ハ飛鳥ハ皇子
子宮ハ香山ハ事歌ハ見えたるガ城戸ハ和名ハ小
高野ハ廣瀨郡城戸郷有リ其ハ上ハ一ニ丁高野
原之宇倍ハと有リ上ハ一ニ丁高野
あり是を以て殯殿之處ト園陵之處ト訓ハを當リり
とい云ふハ然れども此の伊弉册尊ハ萌御ハふハま
いハ然り殯宮ハと事固ハり有ベくも非れハ此ハ
御紀ハを記スて給へり其頃ハ殯宮ハ一ニ丁然り園陵ハ
物為ハるハ事ありハ故ハ其俗語を以て然傳ハり
者ハして真ハの古義ハハ非り事云ハも更ハあり思混ハふ可ク

今更ナリ私記小伊
政太里志止伎乃
と訓三金澤澤本小
伊伎多理志又伊
小邪理志と訓名共

ら但通證取園陵之義と有孝徳天皇大化元年
御紀小脩治宮殿築造園陵と見えて字典小帝王
陵寢曰園と有其義を取て云るあり然れども予が
此小其園陵をとり園和名坂小園圃又園圃と和
名曾乃一云曾乃布と訓陵小丘陵と熟す字少
同攻小丘と云周と和名字加と見え名義小陵と字
加と訓りと合せ取れるあり其陵墓近小至るが
りあり其陵墓ハ然り地ハ物鳥多事あり未其
小至るが非りあり礼記擅り小擇下食之地而葬
と云ハ異あり可し皆右の斂字の事と通證小斂當
斂作纂疏作驗韻會音斂殯斂也一本作斂與斂別と有
り然れも御紀小多く斂作れハ今改む可し非
斂名義攻小斂俗斂古文殮同と見え又斂俗〇生平と
斂こ有れハ當昔せ小用ひて異まさりあり
江點小伊邪理斯登伎と訓り誤あり此ハ右小到殯
斂之處と有れハ死骸の許小到して給へるが如く云
成したる所ありハ然る意して書れたりけりも亦知

今天孫降臨章時程高
彦根神の張と給ふ所
小類天推考之平生に依
りて固より人の手
論の無く其苦の事

べりさびれども甚く味氣無き事あり能思ひても見
小伊特諾尊と伊特冉尊ハ御夫婦小坐あり八洲起
元章第一書小然後同宮共往而生兒と有小非ずや
假令火神と生給ふも有れ二柱並御在一坐べけれ
ハ其時縱や崩御り坐とも其御有狀とだ小所知食ず
て尋行りせ給ふ程小隔在る處ありのやハ然る欲
見其妹ハ其死骸と見ゆと欲して往坐すと爲り幸
小生り時の如く化て見元奉りて給ひて共小語る
せ給へるを若按外小然るがりせハ凡人も起て
拙く愚ふ御事少り百々然れハ此の文の仕立

△平下小常丹七異名
常夜女名字

いゝも然る趣も取成せりあゝめりも傍も止し古
傳有て攻り時終り其意の立つ所無り可き者あり
仁徳天皇御紀小大鷦鷯尊聞太子薨後難波馳之
到菟道宮太子薨之經三日時大鷦鷯尊標擗叫哭
不知所如乃解髮踏屍以三呼曰我皇太子乃應時而活
自起以居也百あふり同トりるまじ事あぐずや
如平生と云常と云事あり其生平と云ハ聯と云ハ
同トり事の異りたる節の無して平和なりと云語
あり古事記小恒無歎今夜為大一歎と有ハ其異れり
節を云ひ其下小妻恒通海道欲往來然云ハ即塞海坂
而返入と有ハ其節を異りたるあり万葉三十三小常將
有等和我不忘久尔又三十吾命毛常有奴可あど見え

△尔自殿騰戸出向

舊事紀小此文を取て書りハ猶平生と有ハ久代ハ
然る本、有しハ可一今も常あり事と俗ハ平生と
字音ハ唱ふやハ通證ハ漢書王平慕之と有り
給へりハ海宮遊行章第三一書小時海神迎拜延入
と有ハ同ト古事記ハ此事を尔自殿騰戸出向之と
有て其ハ黄泉國あり女神の大殿の戸を騰り現御身
あがし出迎へ給へり由ありと此ハ然らば女神の既
小亡給へり其御魂の常の御有状小化て其殯宮小見
ハれと云御在り坐す由あれども甚し忌ハしと妖言
と云者あり他古傳の旨小契合ざり者あり一書ハ
右の如く信り難き事の多在るを止小云り如く古傳
ハ僅小此下あり雷等皆起進來と云ハ以下耳あり

△在第六書言小出立傳
百丁の事

か其^レ出^レてハ聞元難^キ事^ニ依^テ黄泉國^ノ故事^ヲ此^ノ持
出^テ聯^ル者^ノ被^ル靈^ト云^フ者^ノ狀^ハ取^ル者^ノ身^ノ
あり迎^ハ身^ヲ合^スあり可^ク向^ル來^リ人^ノ其^ノ身^ノ
往^テ逢^フ意^{アリ}万^ノ葉^十八^丁小^ノ夫^夫丹^出立^向十九^丁八^丁
小^ノ曉^來者^出立^向暮^去者^振放^見都^追二十^丁十八^丁小^ノ伊^田
卒^可比^加弊^里見^世受^氏多^有此^方出^テ被^方
小^ノ向^方此^方限^ル九^丁出^迎云^ハ被^方
來^リ對^テ此^方向^方迎^ハ向^ハ同^言同^義
自^他差^別有^ル事^{アリ}然^レ記^傳五^小古^言小^ハ
迎^ハ向^ハ通^ハ書^ハ例^多一^ト云^ハ如^ク
故^ハ古^ノ如^ク古^ノ事^記○共^語古^ノ事^記小^ノ自^殿騰
小^ノ出^向之^時伊^邪那^岐命^語詔^之愛^我那^逆妹^命吾^與汝

△中^テ頭^身相^語
ハ七^御在^一羊^一者

△三^行和^禮立^待連
歸^坐又^復解^佐氣
氏^多知^麻利^武
有^ハ事^記古^ノ事^記
段^ハ其^ノ事^記古^ノ事^記
と^も然^ル其^ノ方^葉

所作^之國^未作^竟故^可還^云と有^ハ即^共語^{あり}然^ル
と口^談小^ノ出^迎共^語聞^中有^聲也^と云^ハ也^ハ次^小言^訖
忽^然不^見と有^ハ如何^見た^らむ異^ハ事^{あり}女^神
の語^ハも勿^レ視^吾と宣^ハり非^ズや其^ハ平^主の給^ヒ
て内^ハ入^レ給^ル時^ノ御^言ハ此^ノ非^ズや若^シ其^ノ御^體の見^ル
元^マせ御^在坐^一事^ハ著^リ非^ズや若^シ其^ノ御^體の見^ル
聲^有て形^無く猶^如上^平○請^勿視^吾ハ第六^一書^小
と云^ハ徒^事と成^ル者^{あり}○請^勿視^吾ハ第六^一書^小
請^勿視^之と有^ハ同^ト傳^十百^四十^五丁○忽^然多^知麻^知
尔^と訓^ベ神^武天^皇御^統小^ノ忽^然而^寤之^と有^ハ如^ク
率^爾義^{あり}万^ノ葉^元十九^丁小^ノ立^走叫^袖振^反側^足
受^利四^管頌^情消^失奴^{十五}丁^率尔^今毛^欲見^{十一}十五^丁

△伊^須
岐^岐
走^ル

率^{ナミ}尔思出乍^{ナミ}あじ頃^{ナミ}をも率^{ナミ}をも然^{ナミ}訓^{ナミ}十三^{ナミ}立^{ナミ}
待^{ナミ}尔吾衣袖^{ナミ}尔置霜文^{ナミ}氷丹左^{ナミ}散渡^{ナミ}と有^{ナミ}立^{ナミ}待^{ナミ}ハ能^{ナミ}言^{ナミ}
義^{ナミ}を明^{ナミ}せり^{ナミ}と云^{ナミ}べ^{ナミ}其^{ナミ}ハ忽然^{ナミ}ハ立^{ナミ}て待^{ナミ}つ程^{ナミ}の久^{ナミ}ふ
間^{ナミ}を云^{ナミ}と通^{ナミ}ゆ^{ナミ}ハあり^{ナミ}十六^{ナミ}夜^{ナミ}の月^{ナミ}と後^{ナミ}歌^{ナミ}ハ立^{ナミ}行^{ナミ}
以^{ナミ}云^{ナミ}ふる可^{ナミ}一^{ナミ}万^{ナミ}葉^{ナミ}三^{ナミ}小^{ナミ}座^{ナミ}待^{ナミ}月^{ナミ}開^{ナミ}乃^{ナミ}門^{ナミ}後^{ナミ}首^{ナミ}と云^{ナミ}ハ後^{ナミ}
世^{ナミ}小^{ナミ}云^{ナミ}ふる十^{ナミ}八^{ナミ}夜^{ナミ}の事^{ナミ}あり^{ナミ}ハあり^{ナミ}措^{ナミ}右^{ナミ}の頃^{ナミ}字^{ナミ}を名^{ナミ}
義^{ナミ}吹^{ナミ}上^{ナミ}尔波^{ナミ}加^{ナミ}尔又^{ナミ}多^{ナミ}知^{ナミ}麻^{ナミ}知^{ナミ}尔と云^{ナミ}訓^{ナミ}有^{ナミ}と率^{ナミ}字^{ナミ}ハ
尔波^{ナミ}加^{ナミ}尔と云^{ナミ}訓^{ナミ}耳^{ナミ}見^{ナミ}ゆ^{ナミ}れ^{ナミ}び^{ナミ}又^{ナミ}多^{ナミ}知^{ナミ}麻^{ナミ}知^{ナミ}と云^{ナミ}訓^{ナミ}ハ
語^{ナミ}の^{ナミ}○不^{ナミ}見^{ナミ}ハ上^{ナミ}小^{ナミ}猶^{ナミ}如^{ナミ}生^{ナミ}平^{ナミ}出^{ナミ}迎^{ナミ}共^{ナミ}語^{ナミ}と有^{ナミ}ハ如^{ナミ}
親^{ナミ}ハ眼前^{ナミ}ハ出^{ナミ}迎^{ナミ}ハ坐^{ナミ}て共^{ナミ}語^{ナミ}ハ御^{ナミ}在^{ナミ}ハ坐^{ナミ}ハと
勿^{ナミ}視^{ナミ}吾^{ナミ}と申^{ナミ}給^{ナミ}云^{ナミ}程^{ナミ}ハ有^{ナミ}け^{ナミ}れ頃^{ナミ}ハ見^{ナミ}元^{ナミ}と云^{ナミ}御^{ナミ}在^{ナミ}
坐^{ナミ}成^{ナミ}て女^{ナミ}神^{ナミ}の所^{ナミ}在^{ナミ}を失^{ナミ}ハる^{ナミ}と云^{ナミ}あり^{ナミ}口^{ナミ}訣^{ナミ}ハ忽然^{ナミ}

不^{ナミ}見^{ナミ}靈^{ナミ}空^{ナミ}無^{ナミ}聲^{ナミ}也^{ナミ}と云^{ナミ}る^{ナミ}ハ此^{ナミ}を殯^{ナミ}殿^{ナミ}之^{ナミ}處^{ナミ}と云^{ナミ}ハ中^{ナミ}世^{ナミ}
人^{ナミ}の狡^{ナミ}意^{ナミ}ハ成^{ナミ}なる事^{ナミ}を正^{ナミ}ハ辨^{ナミ}じり^{ナミ}説^{ナミ}あり^{ナミ}ハ共^{ナミ}小^{ナミ}云^{ナミ}
小^{ナミ}も足^{ナミ}じり^{ナミ}事^{ナミ}あり^{ナミ}ハ此^{ナミ}ハ百^{ナミ}事^{ナミ}記^{ナミ}小^{ナミ}且^{ナミ}與^{ナミ}黄^{ナミ}泉^{ナミ}神^{ナミ}相^{ナミ}
論^{ナミ}莫^{ナミ}視^{ナミ}我^{ナミ}如^{ナミ}此^{ナミ}白^{ナミ}而^{ナミ}還^{ナミ}入^{ナミ}其^{ナミ}殿^{ナミ}内^{ナミ}之^{ナミ}間^{ナミ}甚^{ナミ}久^{ナミ}難^{ナミ}待^{ナミ}也^{ナミ}と有^{ナミ}
如^{ナミ}く其^{ナミ}夫^{ナミ}神^{ナミ}と云^{ナミ}契^{ナミ}と云^{ナミ}給^{ナミ}ひ^{ナミ}て其^{ナミ}殿^{ナミ}内^{ナミ}ハ還^{ナミ}入^{ナミ}せ^{ナミ}御^{ナミ}
在^{ナミ}ハ坐^{ナミ}ハあり^{ナミ}ハ忽然^{ナミ}不^{ナミ}見^{ナミ}ふ^{ナミ}と云^{ナミ}る^{ナミ}所^{ナミ}ハ非^{ナミ}ハ事^{ナミ}
上^{ナミ}小^{ナミ}次^{ナミ}ニ辨^{ナミ}ハたる^{ナミ}ハ如^{ナミ}く第六^{ナミ}一^{ナミ}書^{ナミ}ハ還^{ナミ}入^{ナミ}其^{ナミ}殿^{ナミ}内^{ナミ}
ハ此^{ナミ}傳^{ナミ}耳^{ナミ}悉^{ナミ}ハ別^{ナミ}物^{ナミ}あり^{ナミ}○于^{ナミ}時^{ナミ}聞^{ナミ}也^{ナミ}ハ
黄^{ナミ}泉^{ナミ}國^{ナミ}ハ固^{ナミ}ハる^{ナミ}地^{ナミ}胎^{ナミ}ハ在^{ナミ}ハ一^{ナミ}域^{ナミ}あり^{ナミ}ハ聞^{ナミ}ハ苦^{ナミ}
の事^{ナミ}あり^{ナミ}然^{ナミ}れども其^{ナミ}ハ如何^{ナミ}ハと云^{ナミ}ハ晝^{ナミ}夜^{ナミ}の差^{ナミ}別

ハ判然ハカニ在る事と通元て古事記ハ且具與黄泉神相
論と見元第六一書ハ吾當寢息と有と以見ハ其常
夜往く中ナカハ書ハ明く夜ハ闇く且ナカハ起タタハ
臥シ事此顯國の如くハ必在りし聞元たハ但天日の
及ツハガリ所多ハ如何ナリし書夜ハ御先の照
有リハハハ俗意の甚シハ者ノハ神の幽境
と知ルハ人の空ノハ定メの然ルハ此ハ于時闇也と云
ハハ今云ハ限リハ非ズハ古傳ハ背キて顯國の殯宮の事ハ取持ハハハ
者ハ見ハ此ハ上ハ引ハ仲哀天皇御紀ハ殯于豊浦
宮爲无火殯斂无火殯斂此謂と有ハ如く殯宮ハハ火
あリハ燈ノハ夜ノ萬ハ寂然トハ事ハ聞ハハ其

殯宮の夜の状を以て右の如く文を成せり可
何レハ有ハ此の事實ハ合シハ者トハ古事記ハ
斂ハの事ハ無キハ其天皇の崩坐ハ所ハ故未幾久而
不聞御琴之音即舉火見者既崩訖ハ驚懼而坐殯宮云
ハ見ルハ一ハ片之火傳ハ十ハ百ハ五十ハハ○舉ハ登母斯氏ハ訓
ハ第六一書ハ此ハ訓入て一ハ片之火ハ有ハ此を
古事記ハ燭ハ一火ハ見元第六一書ハ秉炬ハハ見元
ハ其ハ後世ハ照射ハハ之ハ同ト者ハ名義ハ
ハハ舉ハハ阿具ハ有ハ登母須ハと云訓ハ有ハ
ハハ語の状ハ依て然訓ハ得非ぬ所ハ故ハ古人
ハ其訓を登母斯氏ハ定ハ者ハ可ト言義ハ共ト

其前後の事ハ鎮火祭詞ハ麻奈芽子ホ火結神生給
如何ホ有れ美保止被燒氏石隱坐氏夜七夜晝七日吾辛奈見給
曾吾名妹乃命止申給比此七日比不足氏隱坐事奇止
見所行須時火辛生給氏御保止辛被燒坐支見元大
其時ハ此脹滿太高ハ云時ハ少ハ悶熱懊惱爲
吐ハ有ハ此ハ於ハ起ハ最中ハけハ故ハ甚ハ吐
奉ハ給ハ是時ハ吾名妹乃命能吾辛見給布奈
止申辛吾辛見阿波多志給比津申比吾名妹能命波上
津國辛所知食信吾波下津國辛所知辛申比石隱給比
有ハ終ハ其下津國小罷坐ハ所思ハ成ハ事右

の文を以て心得ハふハ此脹字ハ名義抄ハ瘰俗字
と有ハ和名抄ハ瘰腹満也和名波良布久流ハ見元名
義抄ハ脹ハ右ハ訓ハ又布久禮多理ハ有ハ以見
水ハ俗ハ云ハ産後ハ腫ハ大同類聚方ハ彦名命乃
美古登條ハ美豆袁津尾不佐岐積半禮布久留積有ハ
御陰門ハ御病ハ然ハ有ハ又保乃討登美豆袁火氣
都民婦左支天阿禮婆半禮宇豆紀伊太民末太迦遊斯痛
有ハ火を主給ハ思合ハ其火徹と避
給ハ石隠れ御在ハ坐ハ旁田有ハ
和名抄ハ韮内憤起也和名布久流ハ見元大同類聚方
小師ハ者多ハ連ハ礼美太利須ハ有ハ肉ハ就ハ

此書傳下三卷百
三十一丁より云り

病あり又同枚小痔腫也野王案瘡身体黻起虚満也字
亦作腫波留と有て張と同言あり右小引り保乃計登
美豆袁都氏婦左支云
之り文と考ふ可し
若て第三一書小其且神退之時
則生水神国象女及土神埴山姫又生天吉葛と有り其
事の委曲ありハ鎮火祭詞小與美津枚坂亦坐坐氏所
思食久吾名妹命能所知食上津國亦心息子字生置
氏來叔宣氏返坐氏更生子水神匏川菜埴山姫四種物
字生給氏此能心息子乃心荒比曾水神匏埴山姫川菜
字持氏鎮奉止事教悟給支と有り是あり偕其水神工
神の生坐一事と第四一書小小便化爲神名曰罔象女
次大便化爲神名曰埴山姫と有り如く夫婦相嫁継て

生坐ありぬハ然も有る心と其即右の脹満太高と
御自治めさせ給へりあり其脹満ハ御腹の黻事
右小云り如く太高ハ大同類聚方小太陀漂餘溜比多満連
流波於之於不有是水氣の湛へ溜れを云
あり然り小御小便小水神の成坐水ハ押逐て本小復
くせ給ふ可く又婦黻九流有乃波消詩天奈保久之と
有る湯火瘡小依て肉の黻起れり小川菜を點て直
り消るを思へバ其御大便小土神の成坐水ハ其御功
用を成む爲ふれば此時ハ必其火神を生坐水ハ依て
惱坐ハも悉く癒せ給ひけり其ハ右小見元た

り如く此心息子乃心荒此曾云々御子神等小事教へ
曉とを給へりも先御自の御病と治の試とさせ給ひ
て然後其御教のに至り及べり事と恐にけられも彼
此の御事實と合せて然想像の奉り事のふむ有けり
此ハ伊弉册尊の御上を説し就て必最初の心得ず
ハ得百のまじり事の故に傳十卷百二十九丁百五十
三丁のふじり事の因に云つり事のハ百れども云へど
ミの猶言足ぬ心のりして又此の少ても返しひ説く事
ハ然らば上の引り膿涕虫流又宇士多加禮斗呂の岐
云ふどハ如何の取捌く事のと云ふ第六一書の吾當
寢息と有と古事記のハ雷神成居と有り其ハ謂ゆり
泉津醜女ハ人と有り其鬼共の然り異なり形の有

けむを伊弉諾尊の見驚りを給ひて逃還しを給へり
小就ての御怒るも少し第四一書の悶熱懊惱又此の
脹満太高と有ふどハ素より事の何も異なり
事の然らハ右のニ共に内病ありを膿涕虫流ふど
ハ外病なり其も亦固より甚く異なり所有る者あり
を彼御保止す被燒坐す云ふと云ふを以て其も此の伊
弉册尊の御事の混同小爲る者ありを古より今に至
り近し其條理を別て云ふ事の心憂なり事のありけれ其
雷を醜女と云ふ更あり被り第六一書の吾不意到於不
須也凶目汗穢之國と有り其國を然ら宣へり

けれ伊弉冉尊を指浴ふ非事を知れり其醜めく汗穢き形質ハ伊弉冉尊ハ在ヤ泉津醜女ハ在
 や言ずとも曉りつ可き事あるを然り辨も無くして
 掛すとも甚も可畏に國生坐一大神を一も其名ハさ
 へ負て醜女と云ふ鬼物の列ハ計す奉る事の憤不
 ろしく其大神の御爲ハ云てハ得一も有れり
 如此く強く論ふ時ハ古來の識者を蔑如す耳ある
 御紀ハ撰者をとつ小并せて諍り奉らるハ似て其
 罪本り所無く甚ハ心苦しく有れり也先師等の志
 と續て此御紀の傳を一も如此仕奉ら我任ハ取てハ
 神代ハ古傳を正一天下の大道を明ら奉りて天壤
 無窮ハ寶祚ハ基と固く一仕奉ら此大業を保てハ
 身ハ誰ハ憚りて然り私をハ爲ハ此ハ不此ハ一も
 神と皇との誓びて予ハ境まざる志ある者あり

○上ハ邊字の意あり同ト富登理と訓べ下ハ
 所謂ハ雷者ハ所ハ在首在胸と云ハ又足上陸上と有
 ねハ其御寢坐ハ伊弉冉尊の御上ありと云て事も無
 かり其ハ所ハ師説古史と引て辨らるガ如
 く其ハ八色雷公と云ハ就て古書ハ在ハ限ハ雷神の
 御名を寄集のなるハ素より信じ可し事
 ありハ其照應ハ成べく者あり斯レハ上字
 へつゞ者ハ寶劍出現章の細書ハ蓋ハ蛇所居
 之上常有雲氣ハ見えハ大ハ同ト
 可ハ富登理ハ方手寄りて其傍ハ意あり海宮遊行
 章第八一書ハ設三床請入於是天孫於邊床則拭其兩

事小亦も有けり醜女を雷と云む事ハ如何と思ふも
 有べけねども凡て伊加豆知とい猛く嚴きとゞ神と
 も物とも廣く云む百言あり然れハ彼醜女の猛く嚴
 かり故小稱あると一傳ハ八人の醜女と傳
 ハ一傳ハ八色雷公と傳たり少く實ハ一物あり有
 けり又古事記ハ醜女の追奉れる事ハ有れども其追
 返さる事ハ八雷神耳ありとも思合す可し然れハ
 古事記の傳ハ其二を混ハして醜女と八雷とを別ハ
 爲たる誤の傳多りけり以上と云れたるハ實ハ然り
取意
 言あり古事記の誤を正せられたる趣ハ先伊邪那美命
の傍ハ八雷神成居と見えたりと次ハ伊邪那

岐命の逃還給ふ所ハ即遣藤母都志許賣命追と有
 けり別物の狀ありと下ハ後者於其八雷神副十
 五百之黄泉軍令進と有ハ志許賣の逃返れる事就
 ハ雷神の代わり如聞ゆれども然れず其志許賣ハ又
 千五百之黄泉軍と副て出遣給へり者あり事第六
 一書ハ終追唯醜女と耳遣給へり灼然けりハ
此師説實ハ八色ハ醜女と八人とい云れハ例の強の意
 信じ可し
 ありハ非ずて教のハあり可し偕和名抄神靈類ハ
 雷公一名雷師和名伊加豆知と有れども其ハ第七一
 書小見えたり雷神とて謂ゆハ天鳴雷神の御事小當
 けりハ此八色雷公とい別あり其ハ次ハ採其實擲雷
 者雷等皆退走矣此用挑避鬼之縁也と有ハ鬼と云
 りを以て灼然ハ又同抄鬼魅類ハ日本紀云醜女和名
志古

或説云黄泉之鬼也世人爲恐小兒稱許ニ女者此語
之轉也と見えたり斯れ此ハ色雷公と第六一書小
泉津醜女八人と云りも鬼オニなる事云も更ふれハ其ハ
色雷公と云を承て鬼と云る事實小更小動くまじき
事あり有ける此を以て古件コケンの師説愈ニ基本と堅
くして又古事記コトワザ志許賣と八雷神とを別物ワカモノ爲り
事コトの誤ある事更小言を加ふコト及ぶコトいふ
有ける委オモシしハ傳十卷小就て己小云るを合せ考ふ
可コト一ヒト名義ナガシ以字鏡集ミタマふヒ小魔字マと許ニ女メとメ於オ逆と
可コトも訓たり故思ふオモ許ニ女メハ屈カ居ル田ノふヒ志許賣シコト居ル轉マりルハ非ヒず
て別ワカ醜女オシメと許ニ女メと云言コトの首カりルハハ百ヒ也

△伺其方産者化コト事
和逆而割コト去此即見
驚畏而遁コト是コト有り

○驚而ハ淤カ行ル呂ノ迦ノ志ノ志ノと訓べ一此字を用ひたる例
寶鏡タカラ開始章ハジメ第一書小維日女尊乃驚而墮オ機ノ以所持
按傷體ア而神退矣ニと見え古事記コトワザ御宇氣ミコト小須佐之男命スサノヲノミコ
參マ上天時山川カミ悉動國土皆震示天照太御神聞驚而云
又其天詔琴拂コト樹ノ而地動鳴故其所寢大神聞驚而引
外其室ソトと有り又玉垣宮段タマノカキ泣淚落溢於御面乃天皇
驚起オドロキと見えたるを考直オモしコト恐惶オソれコト固章カタシラつコト由ヨリ小
何れも不意オモ事コトの再用タビタビひたり右の如く見驚聞驚
と有り中ナカ此ハ聞ク方ハ小コト住ル云語コトなり可コト一其ハ威イ字
又權イ字ハと淤カ行ル須ノと云ハ我オ一人と驚オドロりル方ハ小

ありと驚く人より我方小成りなり少く自他の違有
 り耳して其言の同トき共小其聲動くす起れり
 者ありけり然れハ浹抄類ハ音出爲の切り驚ハ音退
 少く其音ハ依て退本より由ある可し畿内の方言小退
 と抄久と云も古在る可く所思えたり若て此ハ有ハ
 色雷止と見えたり所ふハ其鬼共の静り居るハ
 非ハ此ハ聞驚ふると考ふ可し者あり源氏
目小見え
卷
ぬ鬼の顔あり浹抄呂と云
見元猶此言と恐るし心又驚く状より云文選
小際脇と書し又駭と云巖と云浹抄呂久と常小訓
幸あり名字攻小觀と俗偉字と有と字鏡集小觀と
俾と云浹抄登邪志亦多二波志久と訓ハ驚く状と
云言と聞元多二波志久と訓ハ驚く状と

○起追來ハ一時小起立て追來れりあり借第六一書
 于時伊弉册尊云遣泉津醜女八人一云泉津 追留之
 と見え古事記ハ即遣豫母都志許賣命追之有伊
 弉册尊。遣ハ給ふ趣ありと此ハ上小到殯歛之
 處と有ケ如く伊弉册尊の殯宮と僻傳せり故小猶
 如生平出迎共語と云掠り其御靈ハ假小頭御身の
 常ハ状小化坐と云ハ言訖忽然不見と云て其時色小
 其御靈ハ公給へり其時ハ闇夜ありハ一片之火
 と擧て見給へりハ亡ハ骸耳有て其傍ハ唯ハ色
 雷公有り居たりと黄泉國の古傳の有り限と改出

死者の如く悔へざるが故に其雷等皆起て追來れ
 りとも彼が心の如く云ふは甚しき著無き妄言少し
 神代の古傳といは表裡あり事共あり 事の状を以考り
 小古人の神典と
 陰暗き事 ひて云ふは有る事素より然り其小
 文の學必無て叶ひざる事素より然り其小
 文章の續け状多し 其心得亦無て得有る
 うす是と以て漢土の史籍と讀み又其項の習俗と
 て併書述ふ 且事多し故云つは此語は其文
 小當り此文は其義小當り 當り中當り
 を爲つるあり可し 何ふも爲し伊弉册尊と崩坐し状
 小書れしあり 神典小於て大々害有る事古の如
 諸古小引り第六一書又古事記の趣を合せ考ふるは
 雷等皆起追來 此も亦同ト事 伊弉册尊の追奉
 此と仰給へり御語の有けりと簡易小書り故に記漏

せりと見て此語を味ふる小皆起追來の起字此より
 實に字眼と成り所なり其ハ右の八色雷公の如く上
 小説り如く泉津醜女々々て昇りて鬼類多りけりハ
 甚切可畏掛さくも甚も恐るる國生大神伊弉諾尊ふ
 どを追奉れる 諸置き疎ひ散け居て近著ふとも成
 一奉り可小非は 其大神の一片之火を擧げ見行
 一程ふど つゝ寮居つゝも唯畏伏て有つゝむ
 を伊弉册尊の恨奉りて給ふ事 の出來つる 就て追
 留奉れと仰給へり大命の有て 其勢を得て起立
 ち其御被威も皆小負て追奉れる 終り其大神

小追及奉り許の態も出来り者ある可く所思元
名義歟小起字と淤久も多都とも訓り淤久ハ
 伏り對ふり多都ハ居り對ふりと思ふ可此起
 一言少其伏居たる狀の判然小見ゆ事ハ
 故小此と字眼ありと云ふり熟し事ハ狀と思ふ可
 小
 ○道邊ハ美知能倍と訓べ一萬葉七二十小道邊
 之草深由利乃九三十小玉梓乃道邊近五十道邊之
 半花我下之思草十一十小路邊草深由合之又十一路
 邊壹師花又四十道邊乃五柴原能又道邊草冬野丹二
二十小美知乃倍乃宇萬良能宇禮尔多有是然
 訓バ證多本小美知能富登理と有其思
 方勝り所思景行天皇の山邊道上陵の道工備此
も記傳此と同トく美知能倍と訓レハレ

古事記小到黄泉比良坂之坂本時取在其坂本桃
 子三箇云レと有レハ其坂本多道邊多然と此
 小其坂と云レハ其を何方も無道邊の事ト
 其殯宮ト趨出の近路傍と為者ハ此
 古事記と取て文意を補ひ心得り外無レ此事傳
 十百ハ十小云り○大桃樹ハ意富伎那流毛ニ能紀と
 訓り万葉七三十小向峯尔立有桃樹成哉等云ニ又十三
五波之言也思吾家乃毛桃本繁花耳開而不成在目八
方十一四小日本之室原乃毛桃本繁言大王物乎不
 成不止十九二十小桃花紅色丹ニ保此多流多有て

△山海經云東海度朔山
有大桃樹蟠屈三千里
東北曰閼風門方思志念
之云々此事傳周禮記
云有少可一其度朔
師讀有云 夜取少可

後世ハ多く花を詠ねども古クハ右の如ク花をも
實をも詠ハ毛桃と云も其實は事云も更あり和名
桃ハ桃子和名毛ニと有り 同坎ハ杏子和名加良毛ニ
揚梅和名夜未毛ニ李子和
名須毛ニ麥李漢語ハ云佐
毛ニ李桃都婆木毛ニ有
て其毛ハ云名ハ等一ハ種
ハ抑ハ非ズ
然るも同坎郡名ハ陸奥國桃生を毛牟乃不と有り然
れハ毛ニと毛牟と云一ありけり此ハ依て考ふる
ハ毛ニハ諸身モロハの切れ多ハハ非トハ草木の實ハ活物
の身も同言同義ハ多を古言ハ身と牟と云事多在
此ハあり實ハ其實ハ状を見ハ小核を中心ありと左
右より合せたる如クハ其縫目の著く見ハたる者

△梨實物實ハ云
す然ハ桃ハ其類ハ
實ハ唯モリハ
和名ハハ梨類ハ以て
和名ハハ梨類ハ以て
和名ハハ梨類ハ以て
和名ハハ梨類ハ以て

△雷電五ノ記ハハ
雨後隱木ハ本種ハ
秋ハ立時雷鳴ハ
二有ハ見ハ

ありと思ふ可記傳六卷桃子の下ハ云ク凡て本草
ハ花を以て名々ハ有リ實を以て名
ハ梨栗柳ふじハ實ニ云ハハ實の事ハ成(句)云ハ有
ガ如ク此ハ實ハ依れる名ハハ既ハ木名定リた
り上ハ實を云時ハ又別ハ實ニ云ベキ者あり
○隱其樹下ハ古事記ニ同ト傳あり被記あるハハ
雷神亦千五百之黄泉軍ハ追ハセ給ひて此良坂の
坂本あり桃子と卒爾ハ取テ待撃給ヘハ趣あるを此
小隱其樹下ニ云ハ其桃樹を盾ハシて其難を放シセ
給ハハ爲ありハ此ハ神武天皇御紀ハ初孔舎衛之
戰有人隱於大樹得免難仍指其樹曰恩如母云々ト有
ハと同ト御有狀ありハあり可ハ上ハ大桃樹と云ハ

ハ然リ意味有ガ故アリ其追来ル雷を古事記ハ
 於其八雷神副千五百之黄泉軍と有レバ其を防ガセ
 給ふとして立寄テ隠レ給ヘラリ記傳六ハ伊久
 云称アリ神武天皇御紀ハ軍男軍万葉ニ御軍士
 半安騰毛比賜六ハ千萬乃軍二十ハ須米良美久佐ハ
 有リ皆然リ凡テ戰を伊久佐と云ル事ハ古書ハ
 見元ズ甚後ノ事アリ軍字師字と云ル事ハ古書ハ
 云故アリと有リ但縣居大人ノ伊久佐ハ射合箭と云
 事アリと云ル事ヲ信レバ如何ハ射合箭と云
 射合箭人ト説クも其射合射を鳥諸此大桃樹
 料ノ人トして更ハ違ふ可ハ非ズ
 ノ本ハ隠レ御在レ坐テ其實を擲給ヒ又其杖を投給
 へリハ一ハ石撃石の始と爲リ一ハ扣合扣の始と成リ
 けり所思ハ其ハ万葉八三下ハ多夫手ニ毛投越都

△此黄泉國ノ事ハ
 多ク物と稱シ有テ
 戦ハ有レバ古ハ杖と
 戦ハ所作も有リ者云

倍伎天云々と有リ多夫手ハ礫ノ事少シ平家物語ハ礫
 印地とモ河原印地とモ云ル是ハ礫石撃河原石
 撃と云事少シ右等ハ遊戯ハ有レバ熱田神社
 正月十五日ノ祭式ハ右ノ石撃ノ事有テ以見レバ此
 も古征戰ノ具ノ一ハ備アリ者アリ又戰ノ字を多ニ
 加布と訓ハ扣合ノ義少シ元ハ斬屠と主ト爲リハ
 ハ非ズテ扣合伏伏ハ起ル故ノ名多クと思ふ可
 一和名ハ罰罰具の中ハ苔和毛名之毛度杖和名都惠と
 出テハ杖ノ刑ハ斬罪ハ非ラテ以曉ル可シ但
 戦ハ敵を討リ爲リ然リ雖モ殺戮と本意ト爲ル
 非ズ其ノ歸順ハ命ハ爲ル天孫降臨章第二

△浮仕形 遠異記の
日本國百三桃其實
一ノ百三皇國の實
大なる田多し此の如
外國の桃子のふきと
知

書よ故經津彦^主神以岐神鳥部導周流削平有逆命者即
加斬戮歸順者仍加褒美と有を以辨ふ可し元龜天正
の頃の互に殘忠ありし武士
と規則と爲は違ふ所多在し ○採其實ハ其大桃樹の
下小隱れ御在し坐て黃泉軍と戦給むむと所思して
儲けて^{其來り}待せ御在し坐す間も採^{て取ら}給へらるり此を以
て古事記取^下在其坂本桃子三箇待撃者悉逃返也と記
して其待と云一言を以て彼邪鬼と逐却ハせ給ふ可
し神策の^{ニハカ}其間も定ぬ事明せし者あり
り寄せ給へらるり如く^{ニハカ}あけり其樹下小隱れ給へ
御在し坐す其と小肩も取給へらるり其黃泉軍
と得し者近着奉る ○擲雷ハ古事記ハ石の如く待
撃と有り是より其日代宮段も其坂神化白鹿而來

△上小雷等皆起進軍
と有り其軍まぐし

△少て進み競ひて進
來り思後退ま

△私記小遊也
於此字不世久

立尔即以其昨遺之蒜片端待打者中其目乃打殺也
有^向如く待構へ居て撃と云あり然れ此も擲と云
り其も然る事あり百れも其待撃と有り方目易く
て^能聞^能ゆり者あり 同白持^居宮段も於是凡宇迦斯以
聚軍云ハ僕兄尼宇迦斯射返天神御子之使將爲待攻
云ハ將待取故参向頭白と有り待射返又待撃又待攻
待取ふり ○皆退走ハ敗走ると云あり此退走と斯理
叙久と訓來れる其ハ後小放り由て此曾久ハ遠叙
久又ハ多自呂久あど。叙久自呂久あど。同義あり
古事記ハ此と逃返也と有り 然れハ斯理叙久遠叙
て斯理叙久ハ進の反あり遠叙久ハ後退遠退あり若
近着の對ふる事入の知れり如く ○用桃避鬼の鬼

○日本書紀傳十二

○二十九

○景行天皇御紀
有邪神即有惡鬼之
記云浴衣天皇
御紀云大地鬼神誅
人代之語云有古
以少

ハ上小有八色雷云々又雷等皆起追來又雷等皆
退走矣云々其を兼て鬼オビハ云々あり此を以て上
小云々如く此鬼と雷とハ一物して天鳴雷神云々
ハ甚く異あり者めて黄泉國の鬼物の猛く最云々云
稱多々を知バ一和名坊小鬼和名於爾或説云隱字音
於尔説也鬼物隱而不欲顯形故俗呼曰隱也之有也
也此或説ハ甚く信用難ウチヒガタク其公名義坊小鬼字小於
尔ハ有ハ更小也云々又字鏡集共小神小於尔の訓
有リ又魔と許ハ女と也於尔とも訓ハ又和名本草和
名坊等小續断と和名於仁乃夜加良貫衆と於迹和良

非あど云々想て稱呼ハ甚く上り世一り號りたり
者少一有ハバ遙一後小渡來り字音あどと待バク
ゞの事固一りあハバ右の或説ハ信一難き者あり
一隱ハ於尔の音あり漢字三音考ハ出たり如く爾と
良迹紫苑と志於迹と云例も有ハバ隱の音を轉一
て於尔と云ハ常の事少珍一傳十一 小註
り如く於尔ハ大正あどオビの義あり可一其ハ道饗祭
詞小根國底國奥鹿備 疎備來物尔相率相口會事無成
下行者下守理 上往者上守理 夜之守日之守尔守
奉齋奉一有ハ鬼物の本處ハ固一り黄泉國少其國
より出來りて世小福害を爲行ハ一と爲り在り

漢籍の鬼神
神

神等の防禦を守護せ給ふ故に其勢を^送異しく爲
る事能はざりて彼處に逐れ此所に迫りて行く所
無き^ハ故に如くふるを八百萬千萬人の中小の如何に
爲し^ハ故有^レ神等の御守を離る事有る其家^ニ附
入て其災に爲り中も神等の御稜威を畏^レ奉りて
或は散り或は疎りて鬼類の棲る^ニ常處無き事あり
然れば於^ハ大^{オホキニ}又^ハ大^{オホキニ}逃^テ義^トして實^ニ叶^ハ可
くや有^レ其祈年月次第等御門神詞に疎夫留物と有
思ふ可^シ其事共^ニ己^ニ祝詞講義^ニ情^ニ桃^トを用^テ鬼^トを
避^ル其事。大あり^ハ十二月晦日^ニ行^ハせ給^フ追^ハ儼

の御式是なり其ハ道饗祭詞講義に説たる如く其
祭より出たる御式ふれば其祭と共に上古より行ハ
り來つる事あり此大桃樹の故事の起り者あり中
務省式に元年終行儼者云々以^テ桃弓葦矢桃杖頌儼人
と有^ル儀式追儼儀に陰陽寮官人率齋郎等候兼明門
外以^テ挑弓葦矢桃杖頌充儼人云々訖陰陽師進讀祭文
其詞曰今年今月今日今時云々大宮内^ニ神祇官宮主
能^ハ伊波比奉^リ敬奉^ス留^ル天地^ニ能^ハ諸御神等波^リ平久^ク於^テ大比
小伊麻佐布倍志^ニ登^リ申事別^ニ天^ニ詔^ス久^ク攝^ル原^ニ伎^ニ疫鬼^ト能^ハ所
ニ^ハ村^ニ藏^リ隱^ル留^ル布留^ル千里之外四方之塚東方陸奥西

小久那斗神と主と爲て被祭の故實ある事とたふ知
れしはふし追儼の起原も亦此小在りと思知る可
くもむ百けり但其祭文ハ陰陽師の言如へたるふ
ども有て全き古文ハ非れども其趣意小至てハ凡
人の得し思得て定む可き事ありぬ節の多在る
ハ古より傳來れる文を本と爲り故あり事云も更
あし漢土小於てハ此用桃避鬼の法有り此ハ大已貴
行始給へり事ハ傳ハルル所あり有べき通證ハ鼠璞
曰風俗通曰黃帝書稱上古之時有兄弟二人茶與鬱用
度朔山桃樹以制百鬼於是縣官以臘除節桃人重葦索
歲時記桃者五行之精壓邪氣制百鬼本草經曰梟桃在
嶺下落殺百鬼謂之仙木山海經曰東海度索山有大桃
樹蟠屈三千里其東北曰鬼門萬鬼出入也有一神曰神

茶曰鬱墨黃帝家之立桃枝於戶淮南子曰昇死於桃枝
梧大秋以擊斧然此是鬼畏桃今人以桃梗作代歲且桓門
以辟鬼漢禮儀志曰代有所尚周人本德以桃爲梗言氣
相梗梗更也神桃枝於戶童子不畏而鬼畏之桃之制鬼
見傳記者不一而六經亦自可考檀弓曰君臨臣喪以巫
祝桃茷傳曰楚人使公視使巫以桃茷先後殯周禮戎
右贊牛禱桃茷鄭司農於喪祝云喪祝與巫以桃勵執戈
在王前以桃茷除雖聖人不廢例以巫家之說而節之可
乎と有り右の風俗通ハ以臘除節桃人重葦索ハ此の
追儼の事あり黃帝象之立桃枝於戶ハ其鬼門と守り
神茶鬱墨ハ二神ハ象れハ桃枝於戶ハ其鬼門と守り
ゆら然其桃枝を戸ハ立ハ其を神体と云ハ齋く由ふ
ハ師ハ三本國考ハ考記ハ其を神体と云ハ齋く由ふ
ハ皇國ハ神人ハ坐セバ彼小出興ハ給へハ周人
ハ古礼ハ行給へり者あり然ハ漢禮儀志ハ周人
木徳ハ行給へり者あり然ハ漢禮儀志ハ周人
情セハ者ハ見ゆハ同ハ鬼録曰鬼畏東南桃枝故人
取桃針以填宅と云事ハ見元ハ鬼の桃を畏也事ハ石

の如く多しと其何小依と云事を知ざらん神代古
 傳、全く傳ゆらざる故あり憐し可き事と有り
 此○古事記より右、此用桃避鬼之縁也と云語無く
 して尔伊弉那岐命告桃子汝如助吾於葦原所有宇都
 志伎青人草之落苦瀨而患惚時可助告賜名號意富加
 牟豆美命と有り甚と愛たまふ古傳あり此小説て其妙
 處を曉す可し其告桃子、其大桃樹の神靈小宣へり
 小て上小待撃者悉逃返也と見えたる如く其鬼を避
 るに逐ふ事の餘り小神速あり故小此小正しく神
 靈を備へたる事を所知食させ給へり故小然る詔
 勅、有りあり其此返り生出し蒲子も葦り其撫食し

抜食いふど爲し唯暫時の間より其を抑留せり
 けれ其も食畢りて復追來る事猶本の如くありけ
 りを此小至て、唯三箇許の女あり小恐懼て逃還
 けり神も神と甚靈しく奇しく有り故小御言と
 詔せさせ給へり者あり此小就し思ふ小伊弉冉尊ハ
 固より下津國を所知食べし所由有て入坐り故小彼
 國ありも黄泉津大神と申奉り許小御勢坐りと却て
 伊弉諾尊ハ然る雷等小害めり給へり事状と考り
 小到りせ給ふまゝ處小到坐り故小彼預鑿造天地
 之功と有り皇祖天神も預給はざりけり借其桃ハ

大御靈の依憑せ給ひて助奉り給ふ計の事如何
大御靈の依憑せ給ひて助奉り給ふ計の事如何
大御靈の依憑せ給ひて助奉り給ふ計の事如何

比良坂の坂本に頭國の界小在木ありけむ此
樹下小還坐し時小復天神の御靈の相預ハ給ふ
始あり故小桃子小然奇小神靈ハ備りけむ
其ハ其枝と投棄給ふ小岐神ハ成坐て意富加牟
豆美命小岐神小其大樹小御祖小坐小心と
着べき事あり 然ハ其意富加美豆美命を通證小大
此伊弉諾大神 神實也都助語と云々如くあり可らら
天神を除けハ有るト理あるを思ふ可ら然れバ此
大桃樹小天神の御靈の相預りて斯り神威の備有
り事と御心著せ給ひて其名を賜りて事と曉り可ら
其ハ春秋左氏傳昭八年の下小石言于晉魏榆晉侯問
于師曠曰石何故言對曰石不能言或憑焉と有と杜注
ハ有精神馮依石而言と有る其等ハ妖鬼の馮依て言
語を令爲り小我皇典小磐根樹立草之片葉も言語

セバ同ト事あり妖鬼に斯るを況て皇祖天神の
大御靈の依憑せ給ひて助奉り給ふ計の事如何
来り出可助吾ハ下小可助と宣りて序あり記傳六
ニ下小即今此桃子を以て追追來し者共と擊退けり
四下小難免ハ給ふ故小詔ふありと有か如く葦原中國ハ
傳十四 下小説べし宇都志伎青人草第十、一書小
頭見蒼生と有り其説ハ傳十四 下小註す可ら苦瀬
ハ記傳六 二十 下小字伎勢と訓べし此勢小豎横有り豎
ニ時あり長く經行の間ハ入途ハ時を指て
瀨あり是あり其ハ上より下迄長き流の間小瀨ハ處
指て瀨と云ふ渡瀨是あり借川ハ淺き處を撰り渡り

者ふれハ渡瀬ハ必没之處あり故其より轉カレ必渡
 り所あり何れも没之處を瀬といふなり又甚く後
 の事あれば西行歌ハ此處を勢ハ爲しと云ふも此
 處を其處ハ爲しと云意あり此の苦瀬ハ苦患事ハ當
 りりと云て縦横ハ且れり取と百縦横ハ苦一の時
 と苦一之處との二は且れり云事も多あり落ハ記
 傳六二十丁小落ハ沈と同ト云て凶ハ小行ハ落ハも
 沈ハも云ひ吉ハ行ハと上ハも浮ハも云ハと百
 少て明ハりあり者あり古の苦瀬ハ其勢ハ其堅横
 言義ハ勢ハ狭ハ其外ハ小時ハ無ク處ハ無ク追
 小指當ハり事ハ追ハるハを云あり傳十卷三百十三丁

小云り考合可し儲又右の落を沈と説ハたりハ後
の歌詞ハ初ハ我ハ思ハ給ハ御方ハ云ハ又
壺卷ハ初ハ我ハ思ハ給ハ御方ハ云ハ又
歌ハ身を捨テ浮ハるハ有ハと詠ハるハ是ハあり
 患惚ハ記傳六二十丁小火遠理命段ハ惚苦と有り彼も
 此も久留志年と訓ベト天智天皇一十年御紀童謡ハ愛
 俱流之衛云ニ河例播俱流之衛と訓ハと有ハ如ハ可
 助ハ同書同ハ多須祁氏余と訓ハ上ハ如助吾を此
 ハ係テ見ベハ今吾を助ハ如クハ可助と云事あり
 桃の後世追鬼魅を避ハルハ此大御詔ハ依ルハ漢籍ハ
 一ハ桃ハ然ハ功能ハ有ハ事ハ此彼ハ記セハ見
 此ハ御國身ハ外國の末追ハ此大神ハ大御詔ハ

驗有り事知りて甚尊しと云れたる此如助吾可助
 の御事と同ト云ハ上小引も鎮火奈詞ハ火予生給氏
 御保止予被燒坐支云と吾名妹命能所知食上津國不
 心惡子予生置氏來止奴宜返坐氏更生子水神匏川菜
 埴山姫四種物予生給氏此能心惡子乃心荒比曾水神
 匏埴山姫川菜予持氏鎮奉止事教悟給支と有る是ふ
 力此も火を生給ひて甚く惱ませ給へり右の四種
 物を生給ひ其を用給へり依て其悶熱し御病の
 直り給へり以て在ゆる入草の身家も失火火燒の
 災有り小水神ハ匏土神ハ川菜を以て加助吾可助

事教へ悟させ給へり者あり右等の事共小依て桃
 の惡鬼と避ぎ匏川菜の火燒を治するもの一二を以
 も天下小在ゆる金石草木の物毎小別あり功驗の有
 ハ皆國生坐一ニ大神の大御命おど小依りハ事餘ハ
 推准しへて明く可一其ハ本草和名ハ石斛和名須
 和名布保ニ天久佐と云類ハ僅ハ少彦名命彦火ニ出
 見尊の其功能を始て知食一初ハせ給へり依て石
 斛を以波久須利飛廉草を曾ニ木と云名の外ハ神の
 御名を殊て負せたりハ此小依て觀る時ハ元ハ金の
 石草木の名共ハ二柱御祖神の始て定ハせ給へり事
 灼然し然其稱呼を命給へりハ就ても其能毒を分辨
 させ給ひての工ハ賜名號意富加牟豆美命ハ大神留
 事申すも更ありハ命と云名と賜へりあり其ハ皇祖天神の御靈依馮ト

其實ハ右ノ如ク僅小三箇を以てハ雷神也其小副
ノ千五百之黄泉軍を追返一其杖ハ其雷等と此ノ
以還ハ不敢來と宣へル其驗ノ眼前小在ノ事ハ此
其實小耳號けさせ給へル小ハ非ル可ク桃樹ノ全
小豆ハ名多事決一記傳小ハ士清ハ説と信ひて
大神之實と註と此れ也之小通小都小ハ非ず
濁音ノ豆と書けたり小就て別意を求む可キ所
事灼然と者あり掛まくと恐ク伊弉諾大神イサノノ如
此ノ窘められ給へると其桃小如何程小天性小鬼を
避テ可ク功能を備たりとて其力限り有ベキ事

を皇祖天神ノ御靈ノ神積リ御在リ坐一木實ありつ
り故小易と其鬼を逐返とせ給へり者ハ此
實小大神留ノ樹イサノハ有リ者ありけり此を祖木小
爲ク蕃息れる者あり故小又自然小鬼を避ケノ徳
有テ千里ノ外小其功驗を見一石世ノ後迄も其
幸違ハざる事あり有ける上小引る記傳小御國耳
大神ノ大御命ノ驗有ける事知れて甚尊イサノと珍
げ小云れたれども其ハ上小葦原中國と有唯大御
國ノ號と心得られたる事あり傳十四卷小云
大御國ノ號あり事今云ハ限リ小ハ非ルを葦原中國
と云ハ高天原小對テ大地万國を云ハ此
宣へり其大地万國ノ事ハ西戎ノ國耳小限
ず東南北ノ盡夷ノ末迄も同トありぬ可キ苦ノ事

る者 諸伊弉諾大神の御身自然に禍事小遇せ給ひて
凡於葦原中國所有宇都志伎青人草之落苦瀬而患惚
時可助と宣給ひ伊弉冉大神の御身自火燒の災の羅
くせ給ひても吾名妹命能所知食上津國尔心惡子乎
生置氏來止宣氏返坐氏更生子云々水神乾埴山姫川
菜干持氏鎮奉止事教悟給支有何れも然已尊
の御上の苦瀬より國土人民の苦瀬小落て患惚ま
む事を御心小係させ給へるあむ辱一も尊一も
云む語も絶て出来ざりて此小就て思ふ小二柱御祖
神の此生成坐一大地一天地の氣相綱一縷一て生出る

物ハ土石あり草木あり活物あり食物云々衣キ服
小備一可一く居室一小用一ふ可一き料あり其餘一藥物一と成
て人類の疾病を治む可く物爲させ給へる者ありて
岡の草根水の浮草云々至ら近一として國土人民の
爲一小設て無用一ありむ有べしよりけり其神事の
著明きを以て頭一申一こ一東南の暖地一生一る者
小一自然一塊虫一を愁一る者多在り其海一産一出り所小
胡菜一尤一功能有り西北の塞國一住一る者小其寒氣一
牽附一りて疝氣一を病む者自然一小あり一より一多一り是
以て其住一小多一く鳥頭附子の類生て其住一事一云一ふ

小絶たう人ハ如何山とも心着ずてや有けり薬物の
 海外アモリあり國クニ未めて我アモリが天賦アマツクニの神物カミモノを廢クサく捨る
 事コト二柱御神ミコトの如此近チカ小頭見蒼生の鳥トリ御心と
 配ツケり置せ給ふ御恩頼イタガヒを蔑如アホクシ奉ると云者ありや
 然シカれバ今イマ一ヒトも人の病を治ナシつ若瀬ニガハシ小落コノ心ココロ苦クしりて助
 くタとふババ如此コト其地方コノ在アる産物ウツモノを以て治ナシめ
 小事コトハ關カりドを可カ惜カ草根木皮クサネキを廢クサり棄スる耳ミミハ
 小種コノハ關カりドを可カ惜カ草根木皮クサネキを廢クサり棄スる耳ミミハ
 著シり無クさシる氣キ疎ス事コトありケれ斯カ云イハ甲斐無ク弱
 事コトと見ミ抜キれたリ故ユ小近チカ年トシ頃マと成ナてハ東夷トウイ北キ狄テは
 事コトの累ツり行ユて如何ナニ成ナる世ヨ中ナりト心ココロ苦クしリ物思モノ
 事コトの累ツり行ユて如何ナニ成ナる世ヨ中ナりト心ココロ苦クしリ物思モノ
 事コトの累ツり行ユて如何ナニ成ナる世ヨ中ナりト心ココロ苦クしリ物思モノ
 神カミ隨ツふカ大御國オホミクニ風カゼ小立返コノりて天アマ壓オシ神カミの大御勢オホミセを以

治給ひて然シカら犬戎イヌユウを屠コト然シカして本ホの故草木コトの名共を
 浦安國ウラヤクニと成ナる時トキを期キれル本ホの故草木コトの名共を
 考カりシ和名ニ枚ヒ小木コノを千介良チノと云イハるハ招カ有リの義カあり
 天武天皇十四年御紀テンブテウオウシヨウミキ小招魂コノの日ヒ小獻コノ白木煎シロキヒと有アる
 以知べし牛扁ウシヒラを太知未知人佐オホチミチヒトサと云イハるハ忽タニ草クサありシ痢病リョウビョウ
 を治ナシるハ速効スベクキウ有アる名ナありシ鷓鴣菜セウコウサイを麻人利マヒトリと云イハるハ塊
 虫ムシと逐ツ搗ツ立ツる謂イハるハ龍膽リョウタンを衣夜美久佐イセヤミクサと云イハるハ疫イ病ビョウ
 草クサありシ通草ツウソウを阿分アハ比加都良ヒカトルと云イハるハ開ヒ樋ヒ葛カありシ可
 一此草能く水を通スつテ功能有キを以見ミればバ膀胱ホウシヤウを古
 小種コノとも云イハるハありシ梅ウメを宇米ウメと云イハるハ産婦ウツブメの好コト也
 者モノありシ又マタ催生サハシメ小功有キり此を以て號ナるコトありシ可カく

式多し山城國葛野郡梅宮坐神四座 並名神大月次新堂 小平産
 を祈りし其謂有る事天孫降臨章小就て云を待べし
 如此く草木の名共の各其機能を以て定りたる石
 の意富加牟豆美命の例小其名も賜へり必可有可
 く又或は形小依り花依り實小依り其狀小隨ひて
 各異あり名の有る其小稟賦小有る功能の有
 其始二柱御祖神の定りたる給へる事上件小
 云事共と合せて考て曉り可し然し上小本文と擧て
 神の物爲り給へり事共の皆頭見倉生の爲り御
 旨と思ひ著りし其鎮火祭詞ありし顯見倉
 生と出りて顯りし宣ひたりけし吾名妹命能所知
 食上津國尔と有りし云ずして然聞取りし

○投其杖の其ハ上小道邊有大桃樹と有る其を指た
 る者あり因採其實其ハ伊弉諾尊隱其樹下有りて次小云ひ乃投其杖と云ら因イナと乃イナ
 其樹小就て云らと思ふ可し乃字を字書小或爲繩
 事之辭と云ら是あり然れハ大桃樹の立り其樹下小
 隱り御在り坐て其實を採て飛礫の如く擲給ひ
 りニケカハ雷等ハ皆悉小退走れりニケカハを猶其杖を引折て其を
 楅ヒ爲して投させ給へりヒ允ての次第甚著し
 く聞ゆハ岐神の正説ハ此小勝なる者無れハあり
 づヒエヒ云り追難ハ必桃弓桃杖を用ふる古式
 とヒ考ふ可く又其ハ道饗祭と同一一統あり者
 とヒだハ心附たりしハ更小疑其ハ第六一書ハ故
 とヒ入べし所としてハ無き苦あり

便以十人所引磐石塞其坂路與伊弉册尊相向立而遂
建絕妻之誓云々の次小因曰自此莫過即其杖是謂岐
神也之有^レ岐神御妹妹の間を断て伊弉册尊
を避^ル神小非^ズ道饗祭詞根國底國^{與鹿備疎備}
來物^ハ相率相口會事無^ク下行者下^テ守^リ理^上往者上
守^リ理^夜之守日之守^ハ守^テ奉齋奉^ル礼^と有^ガ如^ク彼國
の鬼等を避^ル神小坐^セバ文の錯乱ある事愈以て知
る[、]あり又因曰と兼たる也上^ハ因^ル由無^クハ旁其
謂^レ無^ク其^レ此と同^ク大桃樹小係^テ云^ルあり
むと其^レ其實^ノ事と傳脱せる故小石の如^ク不^意

き狀ふ^ハ成^ルありむ[、]又古事記^ハ上^三十^小
云^ル如^ク桃實^ノ事^ハ實^ニ委曲^シて不足^ル所無^ク
傳^ヘたり然^レも此[、]如^ク引續^キて桃杖^ノ事と云
ざる^ハ玉^ハ疵^有る心^チして甚^ニ遺憾^シ事^ハ違^ハ
其^レ下^ニ至^リて御襖段^{あり}種^ニの物共^を投棄^給
へり最初^ハ故^於投棄^{御杖}所成^{神名}衝立^{船戸}神^と有^ル
水^も其^レ時^ハ御身^小著^ル櫛^{ナリ}者共^を脱棄^ス
せ給^ヘる^ハ謂^{ゆる}解除^{あり}と此[、]其^レ御杖^を投
せ給^ヘる^ハ彼^ハ雷神^又千五百^之黄泉^軍を避^カせ
給^ハむ[、]御事^ハ其^レも同^ク傳^ヘる^ハ此

此書と取て文と成
たり

一書耳別獨其處を得て實正しくあり有ける舊事
乃伊弉册尊親自最後追來于泉津平坂之時伊弉諾尊
乃投其杖曰自此以還雷軍不敢來矣伊弉諾尊復於泉
津平坂以十人所引磐石塞其坂路云と有て桃の事
小續けたるは佳けはとも伊弉册尊杖を投給へる
如く見元又伊弉册尊と雷と云る如く聞えて如何ふ
り其上第六一書を取て又十五百人必生也の下小也
即投其杖云と云ひ御禊段ハ百事記を取て故於
殺棄御杖云と云は如何に其とも捕へ所無く書せ
りも記者小其を正す可き神眼の○自此第六一書
無り故ふり又憐れ可き事あり○自此第六一書
小も自曰此莫過即投其杖と有る如く此字は投其杖の
處を此所取ての義ありあり然ハ此ハ此所の意あり
尚傳十二百見り可し○以還ハ許那多尔と訓べし其
杖を標と爲し其界内と云る万葉三四十小此方彼

方毛君之隨意九三十小處女墓中尔造置壯士墓此方
彼方尔云と有る此方是あり然ハ其標と爲る杖
と彼方小爲る意あり○不敢來ハ下小此本號曰來名
事此歌以て曉る可し○不敢來ハ下小此本號曰來名
戸之祖神と有る係合せて久那と訓べし所あるあり
第六一書小莫過と有ると同ト所あるを思ふ可し其由
傳十二百小云り諸此小雷等不敢來と有る殊小委し
き者小右小引り道饗祭詞小根國底國與鹿備里備疎備
來物と云ふ亦合り其ハ上二十小云る如く其雷と
云るハ鬼の事多と祝詞ハ唯物と云るあり其ハ
祈年祭詞ハ留夫物と云ひ天孫降臨章小邪鬼と有

を私記小安之岐毛乃と訓之又推古天皇十六年御紀
小會靈と豫美都母能又豫母都母能と訓之其字小
ハ當りざれば鬼ハ黄泉國の者おれ然る意小
云り古言ハ有らる可常陸風土記小天地權輿草
木言語之時自天降來神名稱普都大神巡行葦原中津
之國和平山河荒棟之類と有石の神代紀の邪鬼と
云あり又大同類聚方小少彦名命乃美古登仁阿吉鮮
王邪云之者耶麻比乃門止牟別と有て次小阿志計乃
毛能乃字奈自豫李母登須治仁伊當別天阿万祢几美
鳥知仁此路支和差奈志と云り其惡氣の物の身中

小犯し入る狀を宣へるあり若て末小其小應へて母
能乃解者乃自故俚今太毛乃二鮮多訶可味乃分と三
條小別た七給へる其始小乃自故俚と有ハ道饗祭詞
小根國底國與鹿備疎備來物小相率相口會と云り是
あり外太毛乃鮮ハ古事記白檮原小大熊彷彿出入
即失尔神倭伊波禮毘古命為遠延及御軍皆遠延而伏
と有る類を云ひ多訶可美乃分とハ景行天皇御紀小
日本武尊至膽吹山山神化大蛇當道云ハ失意如醉と
見元たる如きを云り此等と共小母能鮮ハ中小
收事ハ甚也此も皆正し神の成給ふ事ハ非ず皆

鬼物の令然多るればあり源氏物語の多く母能介
 の類多ると云う又略して唯小介と耳も云う右の万自
 後撰集恋五小一條が許小甚ふし恋しと云ふ遣た
 りけねバ鬼の画を書て違るとして一條恋しく影を
 だ小見て慰さゆ我が打解けて忠願めく返伊
 勢影見ねば甚い心づ感ひる近うゆ何の疎さか
 りけり有と以知べし漢籍小物怪と云熟字の有ハ
 母能二介小能當れり通證小漢書武帝記物鬼変化以
 記志能使物卻老如淳曰物謂鬼物也史記舍人佐之以
 為物而伺之註佐物也と書せり猶傳十卷二百四十四
 張小云多時置師神の傳をも此小合せ考ふ可さあり
 又万葉小多く鬼字を母能と訓ひ中今思出るを一
 二擧て云ハ四丁小妹似相武登言義之鬼尾十一
 二十小君之手枕觸義之鬼尾又三十丁一目見之兒小應
 戀鬼香又四丁不相鬼故瀧毛響動亦又九十思乱而可

又性氏録未定難ハ
 新家首行麻斯鬼
 命之依首ハ年麻
 志摩治命ハ年真
 麻子ハ代ハ鬼字ハ首
 カクモ其例首ハ

死鬼子又四丁情者妹尔因西鬼乎十二丁小吾者五
 十日手寸應忌鬼尾又十六引見綴見縁西鬼乎猶
 有べし此等ハ唯假字小用へりカも古小鬼を母
 能と云し事を知小足れり又其十三九丁小相見天者
 社吾戀ハ鬼目と鬼字を麻の假字小用ひたり其ハ字
 鏡集名義抄ハ小魔字を於迹とて許、女とて訓る
 其魔の字音を取て鬼字の訓と爲りカ如くハも
 然ハす枉ハの切けり如ハ言ハ其を轉ハハハ方
 葉五三十丁小靈剋内限者平氣久安久母阿良牟遠事母
 無蒙無母阿良牟遠と云て下小種との憂事と云ハ

△傳子三卷百六十
丁本名天藤雲
の下云り

帝摩作魔と云事補行記小有と師ハ云れたり被印土
小て天を曾良長を那賀名を那正下を宇波斯多あど
云るハ皇國の言と相も異りば此方の古言の
鬼を被めて魔と云り如くも何より勿くさるむ
是謂岐神ハ傳十二百十二丁又小云り○其本名ハ
岐神と申すゆりハ其始て號給へり御名を別ハ在
申せらるり神武天皇御紀ハ大般余之地舊名片居亦
曰片立と有る舊名と一事あり猶應神天皇御紀ハ大
神本名云ニ太子元名云云云事も出たり神名武
津國住吉郡大海神社の下小元津守氏入神と有る元
名の義あり其ハ隱岐國知夫郡海神社の下小元名和
多須神と有ると以知べし但其と由
良氏女神社の下小有ハ誤なり△備此ハ本名云云と
有るハ岐神と申すハ後小稱す御名と云事あり

信小然らう有けめと所思る事ハ第六一書小因曰自
此莫過云々又此小自此以還雷不敢來と有る如く伊
弉諾大神の雷等を抑制りさせ給ふ御言の驗有て成
坐り神小坐せば此小來名戸之祖神と見え道饗祭詞
小久那斗神と見えたり共小其本の謂れ小依て舊き
御名ふ事知れたり然るを此時の由を以て道路
と守給ふ神と定坐り其ゆり岐神とハ御名小負せさ
せ給へりゆて來ハと經ハと其義ハ相も異りゆり者
る其前後有る事を明して其伊弉諾大神の事實を
隨小爲りゆり撰者の用意ありて感くる小餘有る

事ありり其ハ此の文是謂來名戸之祖神亦號曰岐神焉と有る所ありども其ハ上の
 不敢來を久那由緒も詳し知難し故ハ事の意を明し其成坐
 物為りり者ハ古語を重しす事如此
 之祖神の來名戸ハ岐と同一事傳十卷岐神の下ハ
 云ウ儲其祖神ハ古史徴ハ此を今本ハ意富遲能迦微
 訓ハ僻事ハ實ハ佐閑能迦微と云ハ假テ書ル
 たりあり其ハ漢籍ハ途ウ神と道祖と云ハりの事ハ
 和名抄ハ道祖風俗通云共工氏之子好遠遊故其死
 後以為祖和名佐倍乃加美と有る意ハて書レたる者
 ありと云レハ實ハ然ル事あり康熙字典ハ祭道神曰祖祖者祖也詩大

春日社記に見えたる
 道祖神と社記ハ
 船戸明神所謂道祖
 神と云ハル

雅出祖註祖將行祀教之也菅家名義抄ハ道祖神
 見元ハ其享ハルあり也
 有テ其訓和名抄ハ同トク口訣纂疏ハ岐神を
 道祖神と註レタル然ルハ其道祖を布那斗と訓
 べりも有り姓氏録右京諸道祖史と有ハ孝德天皇
 白雉四年御紀ハ鯽魚戸直トドノエと有ト同族と聞ゆレハ布
 那斗と訓ル外無ク又續紀二十卷ハ出たる道祖王
 の御名あり元ハ其道祖神を祭ル其地名ハ依レ
 りハ其岐神の名ハ本着ハありハ古ハ道祖を布那
 斗とも訓ル者ありけハ聖朝詔詞解纂二十詔の
 訓ハ先古事記ハ船戸神と有ト書紀ハ岐神と有
 口訣纂疏ハ此ハ道祖神と注レタルあり道祖

の字ハ漢國の名を以て當たり多クハ實ハ船戸神也當
り然ル水古ナリ此神名の布那才と道祖と也書
美と記せしむも岐神と同一事あり此ハ如何なる由
訪けり延久二年の十月許大和國古市人北浦定政を
訪けり添上郡道祖村と記せり定政ハ聞ク平城
ハ南一里許今も然る村名有と云ハ於て船
戸王ハ其地名ハ取れ御名多事を知り又其地ハ
宮城四隅ハ一ありて道饗祭を被行ハ饗土多事
と知れり其ハ今の平城ハ南ハ古京の異隅ハ當此
ハバ 諸其祖神と申す事ハ傳十二百六ハ己ハ委曲ハ
註せらる如く傳六一書ハ故便以千人所引磐石塞其
坂路云ハ所塞磐石是謂泉門塞大神也と見え道饗祭
詞ハ大ハ衢ハ湯津磐村之如ハ塞坐皇神等之前ハ申

久ハ衢比古ハ衢比賣久那斗止 御名者申ハ見え
ハ祖神ハ塞神の字の義ハ實ハ來名戸之祖神
と申す可き御名の狀ハハ有あり遙ハ後の物ハ
ハ拾苴抄ハ多ク問夕食歌ハ布那斗佐閉夕食之神ハ云
ニと有ハ同ト義ハ多ク思ハ可ハ臨時祭式蕃客ハ朝
の所ハ障神祭云ハ右客等ハ京前二日京城四隅爲障
神祭と記され各國ハ石の道祖神と祀ハるを幸神
と記リ云ハハ皆其因ハ所有と知ベハ 諸其障神祭を
道饗祭於京城四隅祭と有ハ臨時祭式ハ宮城四隅疫
神祭若應祭京城四隅准此と有ハ皆同神等の祭ハ
を其事の趣ハ依て如此ハ其名稱の異ハあり又行
幸時祭ハ小ハ坂祭と云ハ又蕃客送坂神祭と出たハ

△伊勢集小物八行
 人の許小幣を結
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける
 舞上り物へ能ける

右小同ト傳十卷二百
 五十七丁小云し、
 ○神祇令季夏道饗祭義解小謂
 ト部等於京城四隅道三ノ上而祭之云々有り然る小和
 名坎小道神和名太無介乃加美道ニテナリ上祭一云道神也ニテナリ
 見えらるる一事小即手向神と云義あり然る道
 饗と云ハ義解小預迎於路饗過と有ハ意手向と云ハ
 幣と取向て祭ハ意ハ其趣又異ハる者あり然
 レバ三代實録小元慶二年五月廿八日癸卯授越中國
 正六位上手向神從五位下と有テ神名と成ルル由其
 手向と為ル神ありハ自然小神名の如クも成ルル
 小入道饗神と云ハも亦同トリハ可ハ万葉十七
 十四

丁四小刀奈美夜麻多牟氣能可味小奴佐麻都里安我詩
 比能麻久と有ハ越中國ノ歌ありハ其神ありハ
 也有りハ其短歌小多麻保許能美知能可未多知麻比
 波勢牟と有と合せて和名坎名義坎ノ道神と書レ
 太無介乃加美と訓レカノ音ハ近能契合ル者ハ
 國ニ小坂神も多在ル殊ハ此手向神ハ神階ノ事
 有ハ如ハ如何あり由ルも今知ルハるハ歌ハ
 道ニ此詠ハハ殊ノ神ニ御ニ在ルハ相臨
 可ハ神名式ノ射水郡道神社と云有ハ礪波郡と相臨
 ありハ其道神社即万葉十三丁小葦原笑水穗之國
 手向神ハ也有りハ万葉十三丁小葦原笑水穗之國
 丹手向爲跡天降座兼五百萬千萬神之神代從云續來
 在甘南備乃三諸山者云々新夜乃好念通牟事計夢尔

全見社劔刀齋祭神ニ師座者と有る此歌甚心得難
きと此ハ五卷なる好々好來歌の類中人の饒別ハ
贈り趣其末句小見えたり此ハ依て思ふ小上句ハ
皇御孫尊の御天降坐事と詠るが手向爲跡天降座
兼ハ道饗祭の起と云ふて詞ハ高天之原事始
皇御孫之命止稱辞竟奉と有が如く其原ハハ皇祖
天神の詔命ハ成りし神事なる云あり下前ハ劔刀
齋祭神ニ師座者の劔刀ハ發語して手ハ係りる者ハ
ハ齋祭ハ多牟氣祭禮流と訓べ其ハ多牟氣と云事
と七一下ハ齋禮九二十ハ齋祈と書ハ道饗祭詞

ハ限りて夜之守日之守ハ守奉齋奉禮云ニ天下公民
ハ至万氏平久齋給部云と有る其齋字を直ハ手向
と訓せ用いたり者ハ義訓ある者あり然るハ
の中ハ収りれたれども詞ハ神代イリハ詞あり其
任ハ古く記され有ハ又其項定りてニ季ハ行ハれ
又臨時ハ行幸ハハハ神祭疲病ハハ神祭蕃客入
朝ハハ障神祭旅行ハハ手向祭とて人ハ見ハハ聞ハ
ハ常ハ爲ハ事ハハ有ハハ其詞と本ハ爲ハ歌ハハ
詠ハハ字ハハ書整ハハ者ハハ其根源と察ハハ
得ハハ者ハハ臨時祭式行幸時祭若不經ハハ
齋宮式ハハ其三時祭月十五日齋内親王向離宮行路
之間有二處坂祭宮東壇外及多氣度會面と有が如く
天神御子等の幸行ハ如此ハ坂神を祭ハハ給ハ事ハ

△朝野群載廿卷
國司任國小赴國
野修事一山京
關開奉道祖
神事出京之後
所宿之處密奉
敬道祖神全行
願途中平安之申
と有公郎古風を傳
られたる者なり

とを始と爲て度入と雖も旅行小必塚神小手向と
爲向木古の法あり万葉一十八卷紀伊國時川島皇子
御作歌小白浪乃濱松之枝乃手向草幾世左右二賀年
乃經太良武と有も其塚祭を爲る所の松を誅あり
此を九十三小白那弥之濱松之木乃手向草と有り十
二三小山代石田杜心鈍手向爲在妹相難十三五小山
科之石田之森之須馬神小奴左取向而吾者越往相坂
山遠と有も右の塚祭の類あり又臨時祭式小蕃客送
塚神祭云右蕃客入朝迎畿内塚祭却送神と有も如
く塚神小幣を取向て邪鬼と逐却る古の風儀あり者

△路變良

あり入畿内塚十處疫神祭と有も如く國塚或は關處
あり小手向神とて被祭る其小幣を奠え過行く故小
申す名めて國小依てハ關明神とも關戸明神とも申
し其道變祭を爲る所あり故小變上と云所も有り田
あり 皇太神宮年中行事記 二月十二日條小變上二
本櫻本經津長卷云 二月十二日條小變上二
魅自外来者不放入京師故預迎於路而變過也と有り
同ト義少變上ハ變所の義あり次小千時權長云
刀祓祝等引率宇治國山行向道祖神祭礼と有も思合
す可し東海道清見寺西傍小變上と云所有と里俗
と日本武尊東征の時御變を奉りし所ありと云予
諾ハすして云く此の中古小清見關の有一時其手
向神小變爲る所あり故小然ハ又古くより云習
云るありと右の例を引て曉し又古くより云習
ありたるが如く山の越る所を峠と書て多牟氣と云

△古今事類考 旅少手向
小織りの袖も若る可き紅葉も飽く神
取敢は手向山紅葉
の錦神の隨小秋上
小秋の山紅葉の幣
と手向山住し
へて旅心らるる秋
小立山手向神の
有ハコウ秋の木葉
の幣中と散らるる
注ハ幣とい旅行
道の傍の神少手
向の物より道の
の神をハ道祖神
ともい塞神
申す色々の衣の
奉り取り神少手
則手向山住し
手向山神の御方
小取迎
注せり

山然り嶮しき處小ハ手向と爲て過る故の名小て
 万葉三四丁小佐保過而寧樂乃手祭也置幣者妹乎目
 不離相見漆跡衣十五丁三丁小加思故美等能良受安里
 思乎美故之治能多武氣尔多知互伊毛我能里都るど
 有り是あり古り加思故美等とハ其坂路幣小郷良あど手
 向ハ殊ハ忌慎ハ事ありハ可ハ六丁三丁小
 手向爲等恐乃坂ハ幣奉吾者叙追と有ハ手向爲と恐
 ことと彼所とを云係ハ多小ハ知バハ四丁六丁小周
 防在磐國山手將起日者手向好爲與荒其道とも見免
石の三卷あるハ長屋王駐馬寧樂ハ作歌二首と
有て其一ハ磐釜之凝敷ハ手起不勝而云と
有

ハ其手向する所ハ山少て也建峻しき處なり俗ハ
 山品字箋小嶺高山之可踰而過者と有り是あり俗ハ
 峠字を書ハ其所見ハ此方ハ羽國田川郡羽黒山林麓又
 太平記ハ當下ハ書ハ羽國田川郡羽黒山林麓又
 淡路國三原郡ふじ小塔下村ハ有ハ手向の由ハ
 事ハ更ふ予ハ津名郡仁井村ハ長富村ハ
 道祖神社とて甚神ハ神森有て其小塔下ハ
 山坂有り斯ハ手向と塔下と書ハ所ハ國ハ小
 ハ猶有ぬ可又其手向ハ殊ハ名高ハ臨時祭式ハ
 内塚十處ハ有り其首ハ山城與近江塚一ハ有ハ逢坂
 山あり万葉十三六丁ハ未通也等ハ相坂山丹手向草絲
 取置而と有り其短歌ハ相坂手打出而見者淡海近江之海
 白木綿花ハ浪立渡と有ハ手向ハ木綿と奉りハ其
 事の見立あり又ハ近江道乃相坂山丹手向爲吾越往

△其志一不逢坂の本
 下小註は身兼木綿
 所鳥の韓衣を立田の
 少居へてはくしと有
 を袖中柳、手小世中
 駢りし時四時祭茶
 こと鶏、木綿を所
 て四方の關、到て祭
 るなりと見え又與
 儀抄に逢坂の本編
 所鳥に在るに、居
 う行來を時帝の
 の是は古事なり世
 中難が、一時帝の
 為給ふ事なり、給
 けし綿を所て西の
 朝、至りて鳥の祭
 うるう逢坂、其一の
 關ありと所見え
 心人を皇神と帳中
 取向て我起し行途
 坂の山と別とす

者樂浪乃志賀能韓埼幸有者又返見之續計六つ小狂
 先の幸有むを祈り神社意味見元六三十四大伴坂上
 即女奉拜賀茂之時使超相坂山望見近江海云々夏四月と有
 此小ハ木綿疊手向乃山今日起而詠此小ハ
 相坂。名を隠して唯小手向乃山と有も其名高ウ
 故多あり右の逢坂ハ古關を被置ハガ故
 小手向神と被祭ハと今廢れても猶關明神とて立
 給へる是あり古今集序小逢坂山小到りて手向を
 坂ハの塚多あり手向神ハ我勿又海路ハて手向と爲る
 禁ハりあり有ハ猶多在ウ又海路ハて手向と爲る
 事有ハ万葉一二十小布根竟翁馬乃渡ハ中ハ幣取向

而早還來年七二十大海之波者恐畏然有十方神予
 齋禮而船出爲者如何九二十海若之何神予齋祈者歎
 往方毛來方毛船之早兼ハ有ハ然ハ海路ハも存
 向と爲る所とて有ハりハや工佐日記ハ夜半許ハり
 船を出して槽來り道小手向爲る所有ハ楫取ハて幣
 奉りハ小幣、東へ散れバ楫取の申して奉り詞事
 此幣の散る方小御船速ハ令榜給へと申して奉り是
 と或童の聞て詠る渡津海ハの知夫利の神ハ手向爲る
 幣の追風止ず吹ハるハと有と以て知べ右の手向
 と云ハ如何ハ處多あり今所見無ハと雖も事ハの狀
 と思ふハ海中の風波荒ハ所ハ必幣をハ手向ハて榜

の習俗の有りありを今に絶て爲る事あり石
の知夫利神は道守神とて謂ゆら船玉神あり由己の
祝詞講義よても云々と猶安しく傳十三 諸手向ハ
香泉守道者の下めて説く其も目神たり
右より引り万葉一 二十 幣取向而に見 凡古今集此
度ハ幣も取致ず手向ハ紅葉の錦神の任意と有ハ如
く取向めて並ての神ハ幣帛と奉り事を手向とい云
ず道神ハ限り事あり其ハ神ハ凡て社を定めて祀奉
り方ハ故ハ奉り幣帛と置座ハ捧り故ハ其ハ元
座の意ありと道神ハ社ありも御在セ 饗所再あり 唯幣と取
向て過り外無故ハ然云く其外ハ何事ハ云ハ僻
事あり由上引り書共に見ても灼然事あり諸其手

向り幣ハ石の万葉三ハ木綿疊手向之山十三ハ手向
草絲取置而も有と臨時祭式坂祭條ハ坂別倭文一尺
木綿五兩麻八兩云々と見元たりと一ハ濱松之枝乃
手向草と有と此被合せ見るハ木綿ハ拾苾抄言
祭文ハ絹波 乍卷と有ガ如く疊ハ卷ハ絲ハ取置て共
ハ其手向草ハ着て奉りありけり手向草ハ石少
ハ松多り六 二十 指進乃栗栖乃小野之茅花將落時
尔之行而手向六ふど有ハ草少も木ハも其定
リハ非リ者ありけり 源氏ハ顔卷ハ伊豫ハ十月の
小として手向心殊ハ爲り給ふと有と能登永閑
ハ戸水一露ハ旅ハ道祖神ハ手向ハ故ハ此を旅人

の贈物小古來爲けるありと云ひ縣居翁説小旅行く
 道小此所彼處少く道神小幣を奉るあり其幣古
 細布の長き仕を手向一あり今京と成てハ五色絹
 と成たりと云ひ袋小入て持たるを打散して手向ハ事
 色ハ幣袋と云ひ若菜ハ春の手向の幣袋ハやと思ゆ
 幸ふとく然れども如何ハ古ありむハ天皇の行
 行も古ありむ事ハの百べハ然計り絹ふと尺ふ
 耳あり万葉三四十ハ百不足八十隈路ハ手向爲者過
 忝ハ入尔蓋相牟鴨ハ人の死ける時ハ作ハありが傳
 十二百七ハ小云ハ如く其罷れる屍ハ土ハ埋て下津國
 小就が故ハ然詠りあり伊弉冉尊の御事ハ思寄せ
 あり者あり偕又古ハ引をハ二ハ心鈍手向爲在妹相難

三ハ小妹平且離相見深跡衣十五ハ多武氣尔多知互伊
 毛我名能里都ふと見え又十二ハ三十三ハ小吾妹子夢見來
 倭路度瀬劍別手向吾爲と詠り類何れあり其妹の事
 を云りハ此手向神ハ一も其桃杖を投て雷等ハ莫過
 と宣ひて其を避かせ給ふハ因て成坐ハ神ハ坐事古
 の如くありが此を次ふる第十ハ一書ハ小ハ泉守道者と
 も菊理媛神とも其御名二ハ出て二神の御言を取傳
 へ申せし事有り伊弉諾尊聞而善之と有て二神の御
 心稍ハ相和して其別處立て坐ふハも善ハ一ハ御
 心の往來ひて國土を相有て御在ハ一坐す御事と聞え

これに夫婦の中間を此神の祈り事其謂有り況て手
向の旅めて爲る事小有りければ家人の無事を祈り
行先の幸福を願ふも惚惚と手向神の預り給ふ所
あり事右の如くあり有ければ右小引り古の跡を逐
ひ行ふあり實の神習と云者小有り有りける此手
の事を如此迄長説爲たり多くハ万葉の歌共ありど
を以て明せりと如何と云くは人も有ありども右の
如く一説其部を分りて擧と雖も其究る所一不成
て奇しき説違ひあり者あり如此く並擧て説く我々
ハ小異しむ許 ○入疫神と申す事ハ神祇令季夏道郷食
祭義解小謂ト部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼
魅自外來者不敢入京師故預迎於路而饗過也と有り

又其本文小季冬同之と所見たハ四時祭式小道饗祭
於京城と有り是あり又公事根源抄正月終小代厄御
祭と云有て火祭御祭小並びて是も月毎小行ハると
見えて其次序令式共小鎮火祭道饗祭と相並べり小
同トハ毎月あるを代厄御祭と云ハ者ありけり諸
其二季あると月次あるとハ定れり御式あり行ハせ
被りと凡て其鬼魅ハ神の御守の間隙を伺窺ひ
て人小妖を爲さむと爲る者少て其祀す所ハ疾病と
禍害との二ある事傳二百二十一丁小註ハ如ク
若て右の定式あるハ何と無と小行り多ありと事

之有る時ハ臨時ハ處分^サシテ合行^リル^ト其
 事ガ^リ依^テ名目^ノ違^ハリ趣上^ル手向^シ神條^ハ己^ノ
 註^ラガ^リ加^シ臨時^ノ祭式^ハ宮城^ノ四隅^ノ疫神祭^ト若^ク應^ズ祭^ハ京^ノ城^ノ
 云^ニ又畿内^ノ堺十處^ノ疫神祭^ト云^ニ見^エたり一^ハ二季^ノ
 道饗祭^ノ所^{アリ}一^ハ堺神祭^ト被^レ行^ハル^ト處^{アリ}然^ル
 宮中^ノ疫病^有り時^ハ宮城^ノ四隅^ノ京師^ノ事^有り時^ハ
 京城^ノ四隅^ノ畿内^ノ事^有り時^ハ其堺十處^ノ其疫
 神祭^ト合行^給フ諸國^ノ疫病^ノ流行^シ時^ハ各其境^ノ
 内^ノ堺^ヲ合行^給フ御事^{アリ}續紀^ハ天平七年八月
 乙未^ノ勅^曰如聞^ル比日^ハ大宰府^ノ疫死者^多思^欲救^テ療^シ疫氣^以

古の六代ノ制何^ト
 云^ハ知^ラズ^ル也^ト
 音^ハ小^ノ唱^ハたり^ト
 名^ハ美^カなり^ト
 宇^ハ志^ハなり^ト
 阿^ハ夜^ハ夫^ハ美^カ
 宇^ハ志^ハなり^ト
 八^ハ担^ハ字^ハ當^ハなり^ト
 皇^ハ國^ハ也^ト
 出^レ來^ル
 用^ヒたる^{なり}

濟民命^云又其長門以還諸國守々專齋或道饗祭^祀
 之有^リ是^多其同^ト事^ト同^ト紀^ハ寶龜二年三月戊午
 朔^ニ壬戌^ノ令^テ天下^ノ諸國^ノ祭^テ疫神^ト同^ト四年秋七月癸未祭^テ疫神^ト
 於^テ天下^ノ諸國^ノ同^ト六年六月癸亥朔甲申遣^テ使^テ祭^テ疫神^ト於^テ畿
 内^ノ諸國^ノ同^ト年八月癸未是日祭^テ疫神^ト於^テ五畿内^ノ同^ト八年二
 月庚戌遣^テ使^テ祭^テ疫神^ト於^テ五畿内^ノ同^ト九年三月癸酉大^ニ被^レ云
 二以^テ皇太子^ノ不平^也又於^テ畿内^ノ諸國^ノ祭^テ疫神^ト見^エたり
 此^ヲ以^テ道饗祭^ト云^ニ疫神祭^ト異^ナり^ト知^ベ
 但^シ疫神祭^ト其^ノ疫^ノ行^ハル^ト時^ハ當^リテ^有り事^{アリ}
 故^ニ云^ハ稱^シ其^ノ本^ノ稱^呼ハ道饗祭^ト者^{アリ}
 見^テ辨^シ可^シ仁明天皇御紀^ハ兼^テ和六年正月乙亥

今郷邑毎季敬禮疫神之有詔勅ナリト天下一般
 の御事ハ成ルル者あり同九年三月庚戌勅若天
 行之處國司到境下令防禦疫神之有諸國小也定
 此公事也不成ルル清和天皇實録貞觀七年五
 月十三日夜令佐比寺僧惠照修疫神祭以防災疫之有
 小稍心其事の弘びルル就大髪長の手小也行
 公事と成ルル者あり朝廷は於てナリ如此ト況て
 諸國の想像ニ此也也也過祭の地藏云小
クテズ立疎縮ヲ崇メ權輿ニ河ニ天野信景ハ鹽尻小
 云一ハ道祖神の事あり云木偶男ノ形と居ル又
 其男ノ神像と石小彫テ道衢小置キ此ト後小

石地藏ト混ト舊像ハ其形分リ難シバ多クハ石
 地藏ト寺院ハ崇メ有リ正礼一変シ信ヲ失ヒ又
 所會シ外物ト成リ類カ又ハ村上天皇天曆元
 年八月十四日ハ未ダ於建禮門前修鬼氣祭ト有テ十五
 日ハ下小鳥ハ攘除ス瘡於紫宸殿建禮門朱雀門三箇所
 大枝ト有リ是即右の疫神祭ト陰陽家ト行ハ
 事アリ故ハ其目ト易ク者アリ其ハ西宮記ハ四界
 祭陰陽寮向ニ四塚祭ヲ以藏人所ト入リ爲使四角祭陰陽寮宮
 城四角祭有使所人以上天下有疫之時陰陽寮支度料
 宣ト見元左經記ハ寛仁四年六月十九日參關白殿全
 御覽四角四塚御祭料請奏陰陽寮奉請奏今日侍從中

納言於左仗被定見元たる如く神祇官にて被行來
 つる事を一も寮小御事の成りたるが如く其名
 を改つる者と通えたり朝野群載の宮城四方異方鬼
 氣御祭又宮城四方坤方鬼祭御祭あり有の上引る
 宮城四方疫神祭と云々と同し事ありを明ふ可し
 東鑑廿六の疫癘流布時被行四角四境鬼氣祭と見
 元たれば元下ゆも行ひて苦なり事ありと
 知べし但公事根源抄小鎮火道饗祭と云は四角四境の
 祭於宮城四隅祭と有れば四角あり又道饗祭於京城
 四隅祭と有れば四隅あり其を然云習ひつるあり
 然るを此の四角四境の右と異ふ朝野群載十五
 四角四境祭の下は四角を宮城の四隅と云は四境と云は

和逆塚會坂大枝塚山崎塚と有り建曆御紀の四境
 御祭所衆瀧の谷四人爲使八人也と記とせ給へり
 指檜小二中歴云四境會坂關戸大枝龍華今按會坂東
 在近江國關戸南在根津國大枝西在丹波國龍華北在
 近江國按公家被行四角四境祭之時四境者如上其四
 角者宮城四維是也と見えたり公事根源抄ありと
 見えたりと 儲其疫神と云は傳十卷の註に如く時
 置師神煩神閑靈神等の三神有て其即行疫神の首領
 あり然れども其神等を押へて八衢比石八衢比賣久
 那斗の三神御在し生り其即此の云ふ疫神あり然れ
 ども其行ふ神と防ふ神と小相直りて同名なる混
 りたり物り其由の有り事あり其は道饗
 祭義解の言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於

今靈異記中山談
岐國山田郡有布
敷臣衣女聖武
天皇代衣女忽得
病時俾備百味
祭門左右路於疲
神而鄉食之也關
羅王使鬼來召
衣女其鬼走之疲
見祭食鬼就而
受之鬼語衣女
言我受汝變殺
殺汝恩云々と
有る關羅王使
鬼云々右少謂
ゆら鬼魅も其
道郷食神少從
奉助て其郷食を
共受る者之所
見たり又橋般若
身島と云人有り交
易の爲に越前
敦賀山行て歸
を得て馬に乗
來けり後より三
人追來る者有り
至于山代守治橋

迎於路而饗過也と有り其鬼魅を却給ふ岐神を祭る
事ふれども又鬼魅を祭て饗食し過ゆるが如くも見元
て此亦混るべし書狀あり然れども然る意味必し
も無しといふべし其行疫神ハ此岐神の御
趣は後居る者ふれども其岐神ハ道饗の祭物を奉以
必其神の行疫神も賜ひて其所行を放し令行
給はざる事ありし有りべし然るハ諸の枉神共の
其御治めと仰奉り居て其所作を恣に物爲りて
合せ給へり同トり可傳十卷枉津日神の下考
可其岐神の御祭の預りて鬼魅も被祭らゆと思
し五代帝王物語仁治三年正月條五日より主

暫免耳其日汝日而戎飢疲若在食物那般島云唯有不飯與之令食使鬼云汝病我氣故不依近而唯但莫終
望於家備食饗食之鬼云我味身完無故牛完郷食捕牛鬼者我也般島云我之家有班牛三頭以之進故唯免我也鬼
言今我今汝物多
得食其恩幸故
今免汝者我入重
罪云云有鬼
物を郷食すらふ
借けを佛語を
以て見れ殺牛祭
漢神と云道饗
祭の屬と思えたり
仁明天皇御紀
兼和十二年五月
未山城國言饗食
相樂兩郡境內始
自去三月上旬五
殊多月法三月上
向身赤首黒大如
密蜂好咬牛馬受
處即腫相樂郡
牛死盡無餘終
言郡百姓未之
筭隨分殺禱言
無止息移津之氣
于今行者令下其
申綴喜郡擇井
社及道路鬼吏
爲宗即遣使祈
謝之兼賜治牛
疫方并祭術物
と有る道饗鬼も亦右の例小等

上以御不豫の事有て云ニ九日寅時小萌御云ニ主上
無く渡りせ給ひて近習の人女房などを倒して突
ハせ給はむとして弘御所小滑石の粉を塗置いたりけ
る主上意くして御眞倒の有けるを御犬の立廻ニ
ニ如法小吠參りてなりけるころ前表して有けり即
御膳着せ御在し坐て取敢ず御大事小及びけり併天
魔の所爲あり然れは禁中めて種ニの物現トて見元
けりとりや又ニ條鳥丸の北面鳥丸より西小野依
の姫宮の御在しけり主上の御事として世中わけ
の姫宮も哀小涙より思して二條の南門の妻小て

内裡へ人の馳参るを御覽ト出たりけり西方より
辻祭ふどの音して難一罵りて来れば此程の世中
小唯今何態ふれば如此の有りと怪しく御覽トける
小正小門前を過るを見れば辻祭の田植と云事の様
小態と鳥帽子結びて着たる物玉襷舉り或ハ編木を
摺り鼓を拍つ或ハ拍子を叩きて愁しや水と囃し懸
て東へ通けり此ハ如何小折節不思議の有状哉と見
けり東過後後ハ音も鳥さうけり天魔の能荒たる
やうむと覺えしと有ハ掛まくも恐き天神御子小ハ
坐せども現身一神小堪ぬハ崩御と給ひて世中ハ

一も常夜往く如き折節ありけり故ふ然り鬼魅。形
も見えけりある可きが彼ハ其疫神の御許小侍くひ
し辻祭の見たり仕を擬びて流行りし歩きたるふ
も有ける惜又斯る時ハ鬼魅の外より来りて己小京
師小入つり故ハ断る禍事の有けるふれば預て其入
来らざる以前小其疫神祭を被行て防がせ給はま欲
き御事ありきハ猶然もやと所思しきハ其道祖神
ハ疫病を得る事ふどの此彼有るハ其岐神の邊り
屈まり居たる鬼物の所作ある事云も更あり又其鬼
魅の中ハ迷神と云ふも百り宇治拾遺ハ三條院
のハ幡行幸小云ハ長岡の寺と云所の程行けり小
人共の此邊ハ迷神有る邊り云と云下渡り程小
俊信ハ幸くとハ云て行程小過り遣らて猪下れハ今

過ハ山崎の邊ハ行者の可キ怪ク同ト長岡の邊を
過リ九條の程ハ野面を思ハ又寺戸の岸を上る云
るハありと思ヒ西京の歸來ハ云クと有り
是ハあり此ハ就ク又思ハ合セ事ハ文政の頃ハや
有リけり東本願寺の門主山科へ墓参せらるると供ふ
ど大勢後へて出門せらるる道と西へ取テ桂河
の方ハ空ク居タ其村落の人の其邊と遊覽ハ鳥り
西へ廻リ東へ行ク日ハ暮リ其前ハ駈リ者ハ
警ハ譯ハ常ハの如ク罵リ駈リ事ハ思ヒて何ハ方ハ行ク給
たり傍ハある者ハ不思議ハ事ハ思ヒて何ハ方ハ行ク給
ふハ此ハ桂里ハ侍リあハ云クけり何ハ方ハ行ク給
渡リ給フ者ハあハと詞ハ荒ク罵リけりハ狐リあハ
小ハ惑ハいハれたるあハとて孫ハ心を著クけりハ愈ハ腹ハ立テ
猶ハ廻リ居タたりつクと終ハ小ハ醉ハの覺タりハ如クて京
小ハ歸リれたりと云ク此ハ迷ハ神ハの着タりハあハとハ敷ハ
十ハ人の人を併セて迷ハせたり怒リとてハ戯ハふれり
事ハ迷ハ神ハも有り者ハありけり此ハ世ハ名ハ高ク聞クえ有り
事ハ少ク我ハも人も知る事ハあり其年ハ忘れたりハ

三代吉原録小貞観二
年五月十日壬午於神
泉苑修御靈會
所詔御靈會者崇
道天皇伊豫親王孫
原丈人及觀堂後橘
逸勢文室三宮昌麻
呂等是也並坐事
被誅寃魂成厲近
代以來疫病死
甚衆天下以爲此
災御靈之所生
也始自京後及外
國每至夏秋節
修御靈會往不
斷云一人之疫春初
逆疾疫百姓多斃
朝廷爲祈至是乃
修此會以賽之宿
禱也云云事有て
其後往此事有
鬼魅之共少疫
去疫神と云ふ和事
と見たり

○又其疫神祭を中古より御靈會と云事あり其始ハ
小野宮年中行事小天慶元年九月一日外記ニ云近日
東西兩京大小路衢刻木作神相對安置凡其体髻髻大
夫頭上加冠髮邊垂纓以丹塗身成緋彩色起居不同通
各異貌或所又女形對大夫而向立之臍下腰底刻繪陰
陽攝几案於其前置坏器於其上兒童振雜禮拜懇勤捧
幣帛或供香花號曰岐神又稱御靈未知何神時人奇之
と有り是あり此事扶桑略記ハも出たるを外記記ハ
其原書と所思ハくて殊ハ委ハけりハ此ハを取リ此
ハ上ハ引ク仁明天皇御紀ハ小乘和六年正月己亥令郷

邑毎季敬禮疫神と有る事の推弘ごりて右の如く成
 けりありむと其刻木作神と有て男女二體ありハ
 衢比古ハ衢比賣二神小像りて作れりあり可ハ岐神
 の御像ハ漏にれども未知何神と有れハ其迄の考ハ
 有べくも然れども號曰岐神と有るハ固より其
 神の心得ありぬハ尤も小足ず刻繪陰陽とハ男神ハ
 ハ陽物と刻著け女神ハ陰門と繪成したりとあり
 國ニ小道祖神とて立せ給へりハ陽石と以祭り又陰
 陽ニ石と並祭れりも其二神小像ありあり可き事思
 合す可ハ又稱御靈ハハ深故有る事あり此結小云

右の大夫と略記ハ大夫と有り如何ハ女形
 小對ハハ大夫と云つ可き所あり然れども以
 丹塗身成緋彩色と有と考りハ五位と大夫と云るを
 以て然物為ハハ有ハ衣服全礼服條ハ五位授
 緋衣と見え三代實録ハ元慶二年五月廿八日癸卯授
 越中國正六位上手向神從五位下と有て岐神ハ五位
 成たりハ御在りハ准ハハ其衣袍と緋色ハハ
 延りて今宮御靈會祇園御靈會と云事の出來り
 ハ其最大あり者ありあり玉勝間ハ日本紀略云正曆
 五年六月廿七日丁未為疫神^修御靈會木工寮修理職
 造神輿ニ基安置北野船岡山屈僧令行仁王經之講說
 城中之人招伶人奏音樂都人士女亦持幣帛不知幾十
 萬人禮了送難波海此非朝議起自巷說と有ハ其神輿

今石見魂成廣云云ハ
 統て思合す事ハ
 主けハ實承の頃天
 行ハ者公法ヲ誅と
 多事凡千八百人ハ
 然言ハ國禁を犯
 上ハ誅せしむる事
 爲す然ハ近事
 養老の心とて朝意
 小乘を私ハ外是
 親好ハ其邪教の
 林を破りたり此
 前ハ後ハ比較ハ
 有て誅せしむる
 後ハ其邪教を行
 今ハ其邪教を行
 事ハ人の命を獲
 小断たるとりハ
 万の亡靈何ハ此
 怨と爲ハハハ
 久天二年四月日誅
 滅ハハハ起りて
 修諸國ハ流行ハ
 京大坂ハハハハ
 下ハハハハハハ
 十ハハハハハハ
 者ハハハハハハ
 今ハハハハハハ
 今ハハハハハハ
 其ハハハハハハ
 遂ハハハハハハ

△今も難波の御霊社と申して古の國江の坐六宮遺蹟に於て國幣神を奉祀する者と思はるなり

二基と云るハ右小出たり大夫女形二神の料多可
一禮了送難波海とハ上六十小云り如く其行疫神也
亦疫神小從奉り居り者多其ハ其ト共小送り給へ
り者多可一又長保三年五月九日於紫野祭疫神號
御靈會依天下疾疫也是日以前瑞垣等木工寮修理職
所造也又御輿内匠寮造之京中上下多以集會此社號
之今宮と有り此事諸神記ハ一條院長保二年五月九
日庚辰今日於紫野有疫神御靈會事仍兼日神殿三字
瑞垣等木工寮修理職所造儲也又御輿内匠寮造之說
云長保三年五月九日被遷座疫神於紫野京と見え
師衆底行御靈會被遷此所依靈夢之告也

△然るも春記永義七年の下の五月十八日午天晴介管西宮に人夢神ト之者來云吾是唐朝神也無所來此國已無所據吾所到悉以疫神病若余吾構作住其所了者可留病患也但吾表瑞想示汝以其所可吾社也者件人又見西京並寺傍有光耀其体如銅其光下居此所云東西京人ハ相舉仍向其作社屋又諸府人等致多礼儀里御靈會集集集應云此夢不知誰人爲後記之世号今宮云と有れが今宮の号ハ正曆より八五十年の後小出来れり云々俗石小唐朝神ト云りて疫神の外國に來れり其國輕福の御在坐す宮所も仕奉り多る聞えたり

三年の差有り然れども神殿三字の事紀略ハ漏たりを甚愛たり朝野群載ハ天養二年閏四月八日散位中原師光勘文ハ正曆五年六月廿七日被疫神於船岡長保三年五月九日被安置疫神於紫野京師衆底行御靈會件年ハ天下不靜仍有此儀と有れハ始船岡小安置せり此ハ後ハ紫野小移され故ハ今宮とハ云ありけり正曆五年ハ甲子小長保三年ハ辛丑小此録ハ董仲舒祭法云天地之於人猶猶也五穀之時於害食之州縣内清淨之處云ハ見元ハ右の御靈會也其清淨の處を以て其小被行し人小君と成りり如く此西麓小葬場有と雖も古ハ然るがりけり

公事根源抄に紫野今宮祭五月九日是ハ疫病ノ神ハ
リ正暦五年長保二年天下静カリシ時此神社と
祭ル藤原長能ハ二首と詠トて奉リけりトリヤ其歌
後拾遺小侍トリテ兼テ藤原長能ハ白妙ノ豊幣帛ト執
持テ齋ヒグリ初メ紫ノ野ハ今ノノノハ荒カズル心坐シ坐
花ノ都ハ社定メフト此歌或人云世中騷カリテ侍リ
けレバ舟園ノ北ハ今宮ト云テ神ヲ祝ヒテ公ハも神馬
を奉給フと云ハ傳ハリテ有リ其船園ノ此ト云
小即紫野也今宮ノ地是多ク又諸神記ハ寛弘三年
五月九日於紫野有疫神祭事件祭長保年中始被行

也世號今宮祭又云延文四年四月辨云當社大明神者
永美七年五月九日依神託被崇敬ト有リ寛弘三年ハ
同ト一條院天皇ノ御世號也長保三年ノ五年後
亦ハ其ノ五月九日ヲ以テ恒久ノ神事トハ被定
しル可シ其永美ノ度ハ殊ハ神階也と奉増
しル同記ハ弘安五年後四月廿二日被奉授正
一位ト見エたり右ノ歌ヲ後拾遺ニ十神祇部ハ世中
小テ祭ハ侍リ奉リ可シ歌ニ入ルベシと云諸其疫神
ハ右ノ扶桑略記ハ見エたり如岐神多事申す也
更ニあり熟ル小此今宮ハ一ハ園韓神トも併祭ル也

今大同類聚方惠節
美云神條小花鎮
蘇大倭國城上郡
大神大物主神在
傳之方也惠節尾
初終輕之重紀乎
以波受用并立驗
安流久須利乃方
鎖政羅乃羊那
母毛乃加波能
櫻華此祭小
起力桃皮彼杖小
據此事甚奇
一也神傳小
有ける

志小花鎮神在
遺郡安倉村見之
神名式同

華と有る其式と本社ある大神オホミコ小取コトリ夜須禮祭、行
來キ此コノ少シ有アけル然シレバ五月九日の御靈會、疫神
祭マツル少シ謂イハルル岐神の祭ある可シ三月十日の鎮華祭ヤマトノナリ
八園韓神小就スたる祭多ク事灼然シ者あり因ユ云ハク山城
松尾神社二座の下ノ小祠官三十三家其十家謂フ之ノ社司
轉マ任シ社務其餘祢宜祝ヒ二十三家謂フ之ノ神方預花鎮祠ノ也
見レ元ノたり本社ノ曾形中都大神大山咋ク神二座ノ坐スセ
ハ花鎮祠ノ其別社あり可シ此ノ也大神神を祀ルレ
故ノ名ヲ聞クえたり又シ訓郡久何神社ノ下ノ左ノ下
我レ村今指荷明神ノ又シ有ル花鎮宮ノ在リ久我村ノ有ル也久何
我レ神社ノハ山城風土記ノ依ル小賀茂別雷神ノハ有ル事代
主命ノ坐スセハ花鎮宮ノ亦シ由リ有ル又シ振津國有馬郡有馬
神社ノ所ノ結ケ場ノ村ノ云フ有ル花鎮場ノ村ノ云フ由リ已シ傳
九卷九十八丁ノ云フ其等ノ思フ合ス可シ事ノふりり
○祇園御靈會の事ハ社傳小祇園和語加美所祭神三
乃曾濃

坐神殿三間素戔嗚尊中八王子間東稻田姬間西有リ二
十二社註式小牛頭天皇初垂跡於播磨明石浦移廣卒
其後移北白河東元寺其後入皇五十七代陽成院天慶
年中移感神院中間午頭天皇号大政所進雄尊垂迹西間本御前
一名少將井奇稻田媛垂迹一名婆東間蛇毒氣神龍王
御前判女脚摩乳手摩乳女東間蛇毒氣神龍王
也御前と見エたり中臣被レ吹ク云フ物ノ清和天皇貞觀十
八年疫神崇と作シ萬人病を起ス事以外ありト部日
良麻呂京中の男女を率テ六月七日十四日疫神と神
泉苑小送る其次年又疫神崇る程小百姓神與を神泉
苑小送り尔來年ニ六月七日ノ如此ク為レ附キ是を祇

園會と云ふ其神輿を置く所ハ坂郷感神院と云
寺あり云々と云り然れども三代實録ハ己小負觀五
年五月廿日於神泉苑修御靈會云々毎年至夏天秋節
修御靈會往々不斷と見えたり其より以前ハ己小
御靈會の事ハ有けるを政曆雜事記小負觀十一年始
天王從播州遷座と見え社記小同十八年移此地と見
元たれハ己小行來る御靈會の同ノ祭神の列ハ如ハ
くせ給へりふふ有ける播磨國奉相記小吉備公歸
也歷年數爲平安城東方奉勸請祇園荒町と見え二十
一社記小祇園社此云感神院自播磨廣峯遷座と有北
の崇々奉る由あり勸請あり可一塔廣峯と吉備公
の宗々奉る由あり彼公の本貫少て神名式小備後

國深津郡須佐能袁神社と見えたり其神を祀ハれた
合者多可一彼社の事傳十(同)卷三十五丁小云り見
龍女と今御前と申せり本后後后と申す事少石
小由有る事あり廣峯社説小彼社と神名式あり播磨
國歸磨郡射楯兵主神社と云ハ誤り播磨國殿字風
土記と云物小鎬西郡天落村小古神社有り射楯兵主
神と云二座大己貴命五十猛命あり後小安寶郷中
村小祭る云々と云ハ廣峯小ハ非り事明くけ一三
代實録小負觀八年七月十三日播磨國無位速素彥鳴
神速風武雄神並授從五位下と有る其八王子と申せ
此や古。廣峯神の御事あり可也
ちあり岐神小御在し坐て元りの疫神小坐しける
注式小ハ蛇毒鬼神と有めても八王子と然申せる事
灼然り但其下小龍王女今御前と云細書の有ハ傳
十一三四丁小註せる如く古事記小須佐之男命娶大山

津見神之女神大市比賣と有る其を今御前と申せり
 此蛇毒氣神とい別ふ事混ぶ爲るべし今云
 限ふ非ず大同類聚方小疫癘を阿之介と云はば其意
 と得て毒氣神と書つゝむと蛇字を添て龍王女なり
 一書物其神女神小御在さしりあり其ハ
 小朝熊社神鏡沙汰文の奥入小延久二年十月十四日
 夜感神院焼七同三年七月廿四日有軒廊御被奉造
 蛇毒氣神吉凶事也同四年五月十七日註進蛇毒氣神
 可被造否之由祈請之間夢想事三月十日夜夢想云著
 冠并赤色押金薄衣俗其體甚大感神院寶前頭現以童

今百練抄延久二年十
 月十四日感神院焼七
 御体焼損同四年五
 月十日諸御堂申
 祇園御体焼損可
 奉造否事推少僧
 都公範有夢想事
 と有又

子一人爲待者其髮左右相分乎捧白杖と有ハ上六十
 小引り外記記小見えたる岐神の御像と凡其体髪鬚
 大夫頭上加冠髮邊垂纓以丹塗身成緋色と有小同ト
 御有狀小御在せり考合す可此事本朝世記久安四年三月廿九日の
 下小延久二年十月十四日云々火出来焼失寶殿并諸
 舍屋牛頭天皇御足焼損蛇毒氣神焼失了今度奉出御
 体尤謂希世之所疑者云々然れば蛇毒氣神と申
 ども有り甚忌し事あり
 すハ疫神と申す事あり其ハ岐神小渡り也給ひて祇
 園神の以前より坐て御靈會小祀り神と有し事右
 の貞觀五年の御紀を見て曉る可あり然るを何と以
 八王子と申すると云小岐神ハ八衢比古八衢比賣

右の蛇毒鬼神の手
 捧白杖、有、殊、岐
 神、右の如、女神、
 渡、を、給、つ、此、光、
 胃神の御形、
 八衢、比、古、神、の、
 有、
 神、も、其、御、心、を、一、
 頭、に、見、え、
 有、り、も、又、太、神、宮、

久那斗と三柱坐る故、其比古比賣二神を合せて八
 王子と誤唱ヒガトク一つ者ある可し、又神名式の河内國大
 縣郡常世岐姫神社を今八王子と云も岐神ハ共小大
 八衢の湯津磐村の如く塞坐神、然申せり、
 此彼を別す、
 一者と見え、
 遊、今、月、言、日、撰、参、勤、云、
 東遊類と云、
 推、知、
 子、者、天、照、太、神、所、坐、之、五、男、三、女、等、八、王、子、也、と、有、り、事

ふれども若其如く、
 道秘密記小地神第二是也、
 總耳尊小坐一又第七三宮ハ注式ハ天照太神與素戔
 鳴尊誓給所生五男三女中三女也故曰三宮之有、
 僅小七社の祭神ハ王子を五男三女と云、
 然、
 無、
 其祭神ハ王子と申せり、
 神、
 ハ八王子ハ其相殿神と成給へら者、
 嚙神と申すハ三女神小渡、
 皇と合祭、
 小同、

四年六月廿六日甲子供_レ禊祇園天神堂修行僧建立之
見え_レは_レ其始_レ僧徒_レ仕奉_レり_レ社_レあり_レけ_レり
又天慶五年六月十一日癸酉奉_レ東遊走馬十列於祇園
社依_レ東西賊乱御賽也天延三年六月十五日丙辰公家
自_レ今年被_レ奉走馬并勅樂東遊御幣等感_レ神院是則云_レ
見え_レたり_レ諸社根源_元記臨時祭祇園條_レ東遊歌云_レ神
風_レ八坂_レの里と今_レより_レ君_レの十年と敷_レ始_レひ_レ其
後中絶崇徳天皇天治以後毎年相續と見え_レたり_レ中原
記_レ小齋徳三年六月十五日祇園臨時祭宣命_レ小祇園天
神乃廣前_レ尔云_レと天治元年與利始_レ天限_レ永代_レ天每年
乃今日恒例乃會_レ日_レ東遊走馬_レ并神樂等_レ手調備_レ氏云
ニ_レ有_レ是_レ多_レ祇園天神と武塔天神と申_レせ_レり

う_レ然申_レせ_レり_レ後拾遺集神祇部_レ小後三條院祇園
小行幸侍_レり_レ時東遊_レ小歌_レ不可_レ歌召_レけ_レり_レ藤原
經_レ十早_レぶ_レ神_レの園_レあり_レ姫_レ小松_レ万代_レ經_レべ_レり_レ始_レり_レ
け_レり_レ見え_レたり_レ祇園と迦_レ微能_レ曾能_レと訓_レべ_レり_レ證_レふ_レ
其御靈會の事ハ_レ家説の如く_レ貞觀年中_レより_レの
例_レあり_レ物_レ小見當_レり_レハ中右記_レ小寛治六年六月十四
日祇園御靈會永昌記_レ小保安五年六月十四日御靈會
見え_レ元同十五日臨時祭の儀有_レて天永二年貞觀年中
有此例云_レ可有臨時祭之由世以_レ云然_レ而今日儀如此
了云_レ又中右記_レ小大治二年六月十四日祇園御靈會
有_レて其餘の記録皆然_レり長秋記長養三年六月十四
日御靈會云_レ御靈渡御間大風雨後_開鴨河橋_破大政

所夢ニ御輿渡河一町計流下村間入河荷上之云ニ
 とも見えたり代より有来りり疫神祭ニ云者也工 諸御靈會ハ固イリ八王子小属たる神
 事ハ上代より有来りり疫神祭ニ云者也工 今宮の例あるを其臨時祭ハ一も素戔
 鳴大神其社の主神小御在一坐せば專其大神小被仕
 奉たり一神事ある事申すも更なる御事あり因云續
 小祇園の寶殿の中ハ龍穴有とあり古事談 云延久の頃
 亡の時梨本の座主其深と量とむと爲りけり
 五十丈小及びて猶底無しと云保安四年山法師追捕
 せられける多く寶殿の中ハ逃入りたり其の中
 溝有り其小落入たりつと云けり有り橋本經
 亮説小愛言郡出雲井於神社大月次相嘗新嘗と有ハ
 今の下鴨の比良木社を云あり古ハ別處小在しと今
 の處小移したるあり祭神ハ素戔鳴尊あり出雲と云
 も故有べし又梅小井於申せハ元ハ井上小社の有
 たりありし洛東祇園社尾張津嶋社も素戔鳴尊を祀

△出羽神社と今

りて共小井上小社を建たり然り今比良木社小奉
 り御衣ハ姫神の御服あり此も故有る事ありと云
 れも此小就て思ふ小神名武大和國平群郡楮上神社
 を一本書入小楮上訓井乃及と云り今云ふ信貴山
 あり此を毘汝門と云ハ素戔鳴尊と例の妄説せり者
 ある可一又出羽國出羽郡羽黒山と云ハ其本社ハ右
 の如く井上小作構たり由あり然り故實を知し祭
 初たりあり可けれハ此も同ト神小御在すあり可
 諸今宮あるを此をも共小御靈會と云ふ其御靈と
 申すハ世を憤り怨として死ねる人の靈崇を爲て世人
 と怨め苦しむる事有り其怨怒の靈を被宥むとして
 其社を被定りくと其御靈と云是あり然疫癘を行ふ
 神と成れりハ幽入して其行疫神ハ必従ひて物爲り
 あり可けれハ其ハ岐神の御許可を請奉るがハ其

▲あり天平元年絶死
 給へり凡八所皆空
 靈と有給古備公
 何の恨有や且八所御
 靈と有一人皇の靈と
 置る可也

塚を祀して内小入て其崇を成す事叶ふまじりけ
 れば即其神小属て其御治めを仰ぐ可き固くりの
 事あり諸神記小八所御靈古備崇道天皇 光仁皇子伊
 豫親王藤原夫人藤太夫橘大夫文大夫火雷神と見
 元たる類猶有べし 右の古備と古備真備公と云々ハ
 非ト或説小古備内親王と云々然
 也有べし 早良親王ハ上御靈所祭早良親王古備公と
 云り神低拾遺小山城高野御靈一云京極上御靈一本
 云出雲路御靈と有は其二柱を主として餘ハ八神
 とを祭るあり下御靈ハ伊豫親王と其母儀藤原夫人
 と云り夫人吉子藤原是公女あり社記小當社初鎮生
 大和國內山桓武帝開闢後移祭也と云り藤大夫ハ藤
 原廣嗣あり神祇拾遺小号藤大夫木津御靈同之と有
 り橘大夫ハ逆勢あり同書小下桂御靈同神と有り文
 大夫ハ文室綱宮田凡あり同書小綴喜御靈同神と有
 り火雷神ハ同書小上桂御靈菅原神と云り一説小中

御靈社はありと云々此ハ唯大略
 と云々耳ありハ其書共小説見べし 諸神記一本小
 下御靈聖武孝謙廢帝光仁桓武崇道平城嵯峨御靈八
 所神泉苑社祭申也と見え又一本小ハ下御靈社八所
 内分而云々と有り其下小今按貞觀五年五月廿日
 壬申勅於神泉苑被行御靈會遣左近衛中將藤原基經
 同權中將藤原常行等監會事云々と見え大ハ神社啓
 蒙三代實錄ハ其文と引て所謂御靈者崇道天皇伊豫親王藤
 原夫人及觀察使橘逸勢文屋宮田丸等是也並坐事被
 誅寃魂成癘近代以來疫病死亡甚衆天下以爲此災御
 靈之所生也今茲春初咳逆疫百姓多斃朝廷爲祈至是

修此會以賽宿禱と有か如く怨靈の祟を宥め給りて
爲る御靈會ハ令行給へりて疫神祭と云も事ハ同
ト意あり右の冤魂成癘云々疫病死甚衆と有と考
て曉り可き者あり止ハ下引りト家説ハ貞觀十八
年疫神崇と作り萬人病を起す事以外あり云ハ六月
七日十四日疫神と神泉苑ハ送ると有也己ハ其五年
ハ神泉苑と御靈會と修せり云々處と被定たる其本
ハ却り送り事ありハ此ハ於て疫神と御靈とハ一
ハ故ハ其を御の御在り坐す疫神ハ屬を送り給へ
りて是謂ゆる祇園御靈會の起るなり其即ハ王子

亦名蛇毒氣神ハ屬なる神事ハ今宮御靈會と事ハ
專一なる事を曉り可き者なり世人御靈會と云
有て其ハ疫神祭と云も同トハ今宮ハ此所由
難者あり諸其疫神ハ一も疫を行ふ神ハ非ず疫を
鎮過りり事ハハ坐り居る者あり故ハ其疫神
魂も其疫神ハハ必從奉り居る者あり故ハ其疫神
と主とて行ふ事あり然れハ國ハ天王又ハ八王
子と云り類ハ多ク在る也皆疫神の祠あり知るハ又
轉トて天神ハ嘯と云り社ハ此疫神と記れり其
名埋れ然ハ嘯と云り多ク在る可ハ又諸國ハ御靈祠と
ハ其と御給ふ疫神ハ共○來名戸之祖神と又岐之祖
ハ鎮坐バハ理ありあり
神と申せりト拾芥抄問夕食歌ハ布那斗佐開
夕食之神ハ云ト見えたり其夕食と云ハ後世ハ云

ふ過占と云事少て其トを行ふ事ハ神祇令道饗祭義
解小謂ト部等於京城四隅道上而祭之と有が如くト
部の其祭祀を掌り仕奉り縁ふ因て起り事少て
其も祝詞小高天之原ル事始氏皇御孫之命止辞竟奉
と見えにれハ例の如く天孫降臨章第二一書小汝天
兒屋命太玉命宜持天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫
奉齋焉と有り其部少て其齋の忌部ハ幣帛を主り中
臣ハ祭祀を主り傳へてト部の職掌とハ成れり
者あり其ト其ト部の家業あり依て其岐神小就
てト事をも爲り終り此も亦其神事とハ成れ

りけり者ありむ十三万葉十六十三小戀夫君歌一首
并短歌左耳通良布君之三言等玉梓乃使毛不來者憶
病吾身一曾千磐破神尔毛莫負ト部座龜毛莫燒曾戀
之久尔病吾身曾伊知白苦身尔染保里村肝乃心碎而
將死命尔波可尔成奴今更君可吾乎喚足十根乃母之
御事歟百不足八十乃衢尔夕占尔毛ト尔毛曾問應死
吾之故及歌ト部乎毛八十之衢毛占雖問君乎相見多
時不知毛と有り其意を以説べし其千磐破神尔毛莫
負トハ夫君の來トハ一速振り神の障りありめり
其トも負すハ億ハ病ハ吾身一の故ト爲て今ハト部

小令せり電下あども行ハセドと然サガ小思絶たれ
 ども母命ハ八十之衢小立出テ夕占ユラケもトコも問も
 子為りト卒小死ト吾故小愛ハシ事トあり儲其夕
 占ハ一ト今迂占ト云者ありあり又其短歌湖ハト部
 小も占ふハセ夕占をも問ハセたれども夫君を逢見
 也手著知れずトあり又十一十三小事靈八十衢夕
 占問占正謂妹相依ト八十衢の上小事靈ト冠ウクセ
 たりハ其迂小立テ道行く人の言を聞テ其を以占ふ
 ハ故あり其八十衢ハ詞小大ハ衢ハ湯津磐村之如久
 塞坐皇神等云ト有り大ハ衢の事ハ一ト其八十衢比

事十三行長歌カ
 下乎吾問之可導メ
 之吾ハ昔長久ト首
 下其反歌ハ林衢毛
 下衢毛吾者行月友
 公之將來道之不知苦
 也有ハ借如此云

古神ハ衢比賣神小由有り事を先思ふ可き者あり
 の事ハ下小至テ云ベ一萬葉二小橋之蔭履路乃ハ衢
 尔云ニ六小橋本尔道履ハ衢尔云トあり見元十二小
 海石榴市之八十街尔云ト云事ニ三四十小天地尔
 所百トハ衢八十衢共小同ト事あり五丁小天地尔
 悔事乃世間乃悔言者天雲乃曾久敵能極天地乃至流
 左右ニ杖策毛不衝毛去而夕衢占問石ト以而云ニト
 見元ハ其杖策毛不衝毛ト云ハ第六一書小即投
 其杖是謂岐神也ト見元又此小乃投其杖云ト此本
 號曰來名戸之祖神也ト有り故事小本著テ桃杖ハト
 を投テト問ふ事ハ有けト所思一けハ岐神小由
 有り又其石トト云事ハ此も第六一書小其於泉津平

坂所塞磐石是謂泉門塞大神也と有て其即八衢比古
 八衢比賣神坐す由己小傳十二百六十六丁小註此が共小
 由有て相離ざるを曉り可景行天皇十二年御紀小
 長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之日朕得滅土蜘蛛
 者將蹶茲石如柏葉而擧焉因蹶之則如柏上於大虛故
 号其石曰踏石也云々有ハ右の石トの類と知べ
 又万葉十四小於布之毛等許乃母登夜麻乃麻之波尔
 毛能良奴伊毛我名可多尔伊函牟可母と有り初句ハ
 大拵ト云事おぬバ其杖と以て占問ふ料あり其トハ
 出ぬ事ハ兆ふ出ゆりと云り其兆ハ鹿ト亀トの
 事と云ふ可一此也亦右の杖策毛不衝毛云いと云
 類小有猶夕占と云事ハ万葉四一五丁小月夜尔波門
 尔出立夕占問足ト予曾為之行予欲焉十一丁十三小玉
 梓路往占ニ相妹逢我謂又三丁夕占尔毛占尔毛告有

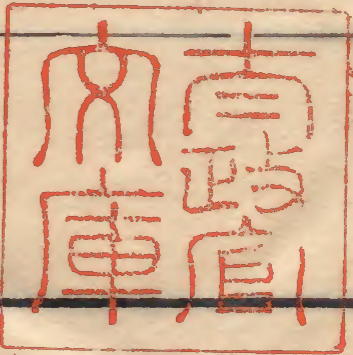
云ニ又五丁不相尔夕ト予問常云ニ又一丁夜占問吾
 袖尔置白露乎云ニ十二丁八小月夜好門尔出立足占
 為天往時禁八妹ニ不相有十三丁二十長歌小妹乃山勢能山
 越而行之君何時來座跡玉梓之道尔出立夕ト予吾問
 之可婆夕ト之吾尔告良久云ニ久有今七日許早有者
 今日許將有等曾君者聞之二二勿戀吾妹十四丁二十小
 由布氣尔毛許余比登乃良路云ニ十七丁三十長歌小可
 度尔多知由布氣乃比都追吾牟麻都等奈須良牟妹乎
 あぢ見えたりガ此夕占ハ一も其身小属たる事の吉
 凶を卜みふハ非ずて多くハ人と待小其来ベ程

とト問ひ人と戀ふとて其逢ふ可く時をトハりて
 皆其道路の往來小孫の事耳あるハ岐神平んて
 爲りトハり有れば必然も有ぬ可く昔の事あり上田
 百樹説小夕占ハ夕來經ふて塞神ト下問ハありと云
 ありハ然る説ふて己小記傳六十四岐神の下小又久
 那斗ト申す布ハ經久ハ來あり中卷美夜受比賣の
 歌小阿良多麻能登斯賀伎布禮婆阿良多麻能都紀波
 伎閑由久ト有て如此ト來ト經トと重なりト云ハ同
 意小成ふト云ハ然る如ク右の足占ト云事ハ海
 初潮清足時則爲足占ト有ハ此ハ宮遊行章第一書ハ
 準ト立置ト此トハ疾ト行ト其數ト計ハ諸其奇偶

を以て其事の可否と定むる事ありト云ハ然も有
 ぬ可く事あり但夕占ハ夕占足占ハ足占ト別あり
 其マ一ト爲拾苾抄小問夕食歌布那斗佐閑夕食之神
 尔物問閑婆道行人與占正尔爲與兒女子云持黄楊
 櫛女三人向三迂問之又于歳女午日問之今按三度誦
 此歌作壞散米鳴櫛齒三度後境内來人答爲内人言語
 聞推吉凶ト有布那斗佐閑ハ上小註ト如ク岐之祖
 神ト云ハ之を歌詞ト爲り故小省けりあり夕食之神
 ハ百樹説小夕來經之神ト云ハカ如ク物問閑婆ハ心
 小決メ難キ事有て其岐神小質ト問ふ事あり道行
 久人與ハ上あり夕來經之神小照應せト云ハ其

禰小來經も人の云言を以て神の御教と定りたり
文小境内來人答爲内人言語聞と云り是なり占正尔
爲與ハ上小引り万葉十一十三 小事靈八十禰夕占問
占正謂妹相依と有り如く正し小告れと云ふり正占
云事ハ万葉ニ小大船之津守之占尔將吉登波益爲尔
知而云ニ百り益爲是なり十四小武藏野尔宇良殿
可多也伎麻左氏尔毛乃良奴伎美我名云ニ有り麻
左氏ハ賀茂翁親小正定なりと云れり同卷小可良須
等布於保平曾村里能麻左低尔毛伎麻左奴伎美平許
呂久等曾奈久と有て大嘘と相對云れバ實小正定尔
も者あり儲拾芥抄の右歌ハ片假字少し書り此小
ハ其混りハと悉ひて右の如く万葉風小字と填
て引り持黄楊橋ハ續後拾遺集 名小刺櫛の黄楊。齒
者あり 無くて吾妹子ハ夕食の占と問不煩ふと崇徳院御製

も有れば古より有來り事少て岐神の神告を請奉
る表物あり女三人向三辻問之又午歳女午日問之と
有ハ其拾芥抄を記せり一項の兒女子の説少し然り
窮屈ハ事少てハ非り事万葉の歌共少て明くけり
作塚散米とハ十字街小至り其小散米を爲り其を内
外の塚と作す故小作塚と云ふあり鳴櫛齒ハ百樹説
小櫛齒と三度鳴すハ岐神と迎ふる法少しと儲後小
其トに多境内小入來經り人の語を神の説とてト
合り事少て答ハ實ハ道行を振の人語あるを此方
少てハトと問ふ小答ふ意と爲りあり内人ハ彼



境内へ入來經る人をと問ふ答せむ入と定めたる稱
 ある可しと云るハ然る言あり此百樹説ハ自著の
 書を如何の伴信友其遺福と取出て正ト考と
 書名を政のたり此百樹が功隱れて世小知人無
 きを可惜し引る者あり又百樹引る或書小迂占術
 元ハ復し引る者あり又百樹引る或書小迂占術
 として四迂小出て手小黃楊櫛を持ち心小道祖神を念
 して歌を唱ふ其歌ハ迂ヨツタ迂迂が占の市四迂占正
 一り此迂占の神此を三返一見元來り人の語を以て
 言ふを定ぬと有ぬ是三迂と云るハ古風ありと云
 り如何小も古の占の如此ハ簡易なる事して其唱ふ
 石の歌ふとも後世狀多ありけり古小其定

